アンドレア＝シェニエ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンドレア＝シェニエ

【Ｎコード】
Ｎ３４０７Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
フランス革命。革命の名の下に多くの血が流れたこの時代。詩人アンドレア＝シェニエは革命に対抗しつつマッダレーナとの会いを貫く。例え断頭台に送られようとも。ジョルダーノのオペラが原作です。フランス革命を舞台にした恋愛ものです。
こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

序曲

アンドレア＝シェニエ

序曲

正義とは何か。進歩とは何か。そして理想とは何か。

まずこう問われてすぐに答えられる者はそうはいない。それ程までにどれもあやふやなものであるからだ。

しかしそれに燃える者も多い。人間とは正義感を持っている。それを否定することも多くの者はできないだろう。余程ひねくれた世界観を持たない限りは。

だが人間の世界とは不条理である。それがすぐに正しい方向に行くとは限らない。むしろそれにより世界が狂ってしまう方が多い。

例えばナチスでありソ連である。彼等には彼等の正義があったのだ。これは紛れもない事実である。それによりどれだけの悲劇が生じようとも。

そうしただけでなく世界にはそれこそ人の数だけ正義があり理想がある。進歩がある。決して一つではない。中には怖ろしいものもある。先に述べたナチスやソ連だけではない。己の独善である場合も多々としてある。だがそれに気付かないのも人間である。人間というのは簡単に割り切れる程愚かではないが賢くもない。邪悪ではないが正義でもない。そうした不安定なものなのである。

そうした人間の世界は何時でも何処でも同じである。かって理想に燃えていてもやがてそれに疑問を考えるようにもなる。そして気付いた時には全てが手遅れだった。こうしたこともままある。

呪縛と言おうか。運命の女神達は無慈悲なものなのだ。人の運命は彼等により弄ばれているに過ぎない。そして人は同時に歴史の神にも弄ばれている。

フランス革命があった。欧州、いや世界の歴史に大きな一石を投じたこの革命は理想社会を築くかと思われた。しかし現われたのは

血の粛清と弾圧に満ちた紅い天幕に覆われた世界であった。ロベスピエールの率いるジャコバン派はこれまでの既成の世界の全てを破壊し全く新しい世界を作ろうとした。その為に邪魔なものは全て破壊したのである。

まず王の首が飛んだ。そして王妃が。続けて貴族達が。やがて仲間やそれまでフランスを支えてきたものが断頭台に登り炎の中に投げ入れられた。神もなく理性というあやふやなものが崇拝されるようになった。血に支配された世界に理性があるかどうかは別問題であった。

そうした血に覆われた世界に一人の男が生き、そして死んでいった。この物語はその男の生涯についてである。

第一幕その一

第一幕　伯爵家の居城

革命による血の帳がフランスを支配する前である。貴族達は今日も何時まで続くかわからぬ宴を楽しんでいた。

よく搾取だ、収奪だの言われる。だが当時のフランスではそれが普通だったのである。貴族達は確かに贅沢の中に身を浸してはいたがそれが彼等を悪と断罪する根拠にはならない。

それが当時のフランスの社会だったのである。こう言ってしまえば責任逃れになるが社会そのものに矛盾があった。

しかしその矛盾は徐々に正していかなくてはならないものである。一挙に多くの者を悪と決めつけ断罪したならば人はそれで地獄の裁判官達と同じになってしまう。

だが今未来の血の世界を誰も知らなかった。そして今は宴の用意が行なわれている。

みらびやかなサンルームである。黄金色の日の光が差し込み大理石の壁と床、金や銀、様々な宝玉で飾られた部屋を照らしている。その中を綺麗な服を着た男達が動き回っている。

「そう、それはそこに」

その中央に一際立派な服を着た男がいて他の者に指示を出している。この家の家令だろうか。

皆彼の指示に従い家具や植木鉢を動かしている。どうやら今夜の宴の準備のようだ。

「植木鉢は何処に置きますか？」

制服の男の一人が彼に問うた。

「そうだなあ」

彼はそれを聞いて考えた。

「あっちに置いて」

そして部屋の隅を指差して指示を出した。

「気をつけてな。割っても大変だし御前さんの身体も傷つけてしまう」
「わかりました」
思ったより優しい家令のようである。他の者のことも気遣っている。
「あ、ジェラール」
家令は側にいる長身の男に声をかけた。
「はい」
ジェラールと呼ばれたその男は答えた。黒く豊かな髪に彫りの深い精悍な顔立ちをしている。身体つきもいい。
だが特に彼の外見で印象的なのはその黒い青がかった瞳である。知性をたたえ情熱が溢れ出るようである。この場ににつかわしぬ程の強い光をたたえた瞳である。
「君はこのソファーを向こうに置いてくれ」
そう言って側にあるソファーをポンと叩いた。
「わかりました」
彼は頷いてそのソファーを手にとった。
「あとは・・・・・・」
家令は色々と考え指示を出した。そして準備はすぐに終わった。
「これで大体終わったかな。よし皆、休憩といこう」
「わかりました」
使用人達は笑顔で答えた。
「奥方がおやつを用意してくれている。それでもいただこう」
「お菓子ですか？」
使用人達はそれを聞いて目を輝かせた。
「ああ、何でもとびきり上等のものらしいぞ。我々に特別に差し上げてくださったんだ」
「有り難いなあ、本当に優しい奥方様だ」
この家の主人もその妻も心優しい主として知られている。報酬は弾むし何かと親身になってくれる。だから使用人達には評判がいい。

「そう思うだろう。わし等が今こうしていられるのも御主人様や奥方様のおかげだ」
家令は笑顔で言った。皆その言葉に頷く。
だが一人だけ別だった。ジェラールだけはその言葉に背を向けていた。
「じゃあ行こう。甘いお茶と美味しいお菓子がわし等を待っているぞ」
「はい」
彼等は部屋を出ようとする。だがジェラールだけは出ようとはしない。
「おや」
家令がそれに気付いた。
「ジェラール、君も来いよ。折角の奥方様からのご好意だぞ」
「いえ、甘いものは苦手ですので」
彼はそう言って断った。
「そうか、なら仕方ないな」
家令はそれを聞いて言った。
「じゃあ一人でゆっくり休んでいてくれ。わし等は向こうにいるから」
「はい」
ジェラールは彼等を見送った。
「本ばかり読んでないでたまにはわし等と一緒にくつろぐのもいいぞ」
彼はそう言ってサンルームをあとにした。そしてその場を他の者達を連れてあとにした。
「さてと」
彼は空いている場所に腰掛けようとした。だが側にあるソファーを見下ろした。
「御前は気楽なものだな。そうやってそこで貴族共の相手をしていればいいのだからな」

彼のその声は嫌悪に満ちたものだった。
「あのキザで鼻持ちならない連中の相手はさぞ楽しいことだろう。昨日もあの若い嫌味な修道僧が付けボクロをした男爵夫人に声をかけるのを楽しそうに見ているだけだった」
彼は貴族達を心の奥底から嫌悪していた。いや、それは憎悪であった。
「厚化粧をして滑稽な髪形をしたあの忌々しい女達。あの連中の情事を受けていればいいだけだしな」
当時のフランス貴族達はロココの中に溺れていた。酒と飽食、そして荒淫の世界に住んでいたのだ。
それに対して民衆の生活は質素なものであった。ジェラールはそれが許せなかったのだ。
「神がそれを許すというのか！？だったらそんな神なぞいらない。俺は俺の信念のままに生きたい」
正義感の強い男であった。そして生真面目であった。
そこに一人の年老いた男が入って来た。ジェラールと同じ服を着た白髪で皺だらけの顔をした小柄な老人だ。
「お父さん」
彼はその老人に声をかけた。
「おおジェラールか。皆はどうした」
「向こうで休憩をとっています。何でも奥方様からいただいたお菓子があるとか」
「そうか、それは有り難いのう」
彼はそう言うと歯の殆ど残っていない口を開けて笑った。
「いつもあの方にはよくしていただいている。それに報いなければのう」
彼の父は善良な男であった。ジェラールは幼い時に母を亡くし以後男手一つで育てられてきたのだ。
「庭の方は終わったぞ。御主人様も奥方様もわしが手入れした庭が一番じゃと言って下さる。有り難いことじゃ」

「そうですね」
ジェラールの返答は何処か空虚だった。
「ではわしも休ませてもらうとしよう。この身体も時には休みが必要じゃ」
彼はそう言うと家令達が入っていった扉を開けた。そしてその中にゆっくりと入った。
「そうして六十年もこの城にいるのですね」
ジェラールは父の後ろ姿を見送って言った。
「あの高慢な連中の為に汗を流し何もかもを捧げてきた。自分の妻の死に目にも遭えなかったというのに不平一つ言わなかった」
そんな父だからこそ彼は尊敬することができた。愛することができたのだ。
「それをあの連中は当然のように考えている。我々は仕え、跪くのが当然だと思っている」
彼はここでサンルームを見渡した。
「虚構と偽善に満ちた部屋だ。所詮は幻影に過ぎない」
その黒い瞳には怒りが浮かんでいた。
「絹やレースで着飾ったあの愚かな連中が笑い合い踊るこの場に一体何があるというのだ、何もないではないか」
呟いているだけで怒りが満ちていく。
「そして楽しい音楽にうつつを抜かしているがいい。そのうちに貴様等は自らの下僕に裁かれるのだ。そして行く先は処刑台だ」
もし誰かに聞かれたらただではすまないだろう。しかし彼は自身の怒りを抑えることができなかったのだ。
そこへ何人かやって来た。三人いる。

第一幕その二

「あら、また綺麗にやってくれたのね」
先頭にいるのは中年の女性である。金色の髪を上でまとめ化粧をしている。だが化粧なぞしなくとも整った顔立ちをしている。瞳は湖の色である。
長身を紅の絹のドレスで包んでいる。その身体もよく均整がとれている。
「ジェラール、皆は何処へ行ったの？」
彼女はジェラールの姿を認めると彼に声をかけてきた。
「奥方様、只今休憩をとっております」
彼は頭を垂れて答えた。
「そう、よくやってくれたわ。ゆっくり休んでくれるように言って」
「はい」
ジェラールはそれを聞き内心怒りに燃えた。その言葉を傲慢と受け取ったからであった。
しかし奥方にとってそれは傲慢ではなかった。彼女はあくまで親切心からそう言ったのである。
二人は互いに誤解していた。奥方であるこの伯爵夫人は自分の中にその傲慢さがあるとは気付いていなかったしジェラールは彼女の親切心を見ようともしなかったのである。
（フン、この思い上がった女め、今に見ていろ。正義が貴様等を何時か裁く）
彼はそう思ったが当然口には出さない。そして顔を上げた。
見れば彼女の後ろにはあと二人着飾った女性がいた。二人共伯爵夫人より遥かに若い。母と娘程離れている。一人は赤い髪に緑の瞳を持つ小柄な女性である。ピンクのドレスを着て所々に付けボクロをしている。
「綺麗ね、マッダレーナ」

そして隣にいる女性に声をかけた。
「ええ、ベルシ」
マッダレーナと呼ばれた女性を見てジェラールはうっとりとした。確かにその少女は美しかった。
茶がかった金の髪を下している。そしてその瞳は青く澄んでいる。白く透き通るような肌を持ち顔はあどけないながらもまるでギリシアの彫刻の様に整っている。
その長身もそうであった。均整がとれそれを白い雪の様なドレスで包んでいる。
「今日も楽しい宴が行われるのね。私今日は歌が聴きたいわ」
「ええ、御前の好きなバイオリンを用意しておきましたよ」
伯爵夫人はマッダレーナを振り向いて言った。
「有り難う、お母様」
この二人は母娘である。つまりジェラールにとっては主人である。
(この方だけは違う。この腐り果てた城においても)
ジェラールは密かに想った。
しかしそれを口に出すことは決してない。ただ想うだけである。
「じゃああとお願いすることは」
伯爵夫人は慎重に中をチェックしている。
「シャンデリアだけね。それはあとでね」
「はい」
ジェラールは頷いた。
「歌手達の様子も見なくちゃ。本当にやることがあって大変」
彼女はそう言うとその場をあとにした。マッダレーナとベルシもそれに続いた。
「高嶺の花だな」
ジェラールはマッダレーナを見送って呟いた。
「だが想うことはできる。それを否定することは誰にも出来ない筈だ」
彼はそう言うと空いている場所に腰を下ろし休んだ。やがて休憩

も終わりシャンデリアに灯りが灯された。
そして客がやって来る時間になった。伯爵夫人は今度は客人達の出迎えに向かった。
「お母様」
マッダレーナはサンルームの入口で客人達を出迎える母に尋ねた。
「今日は高名な詩人の方が来られるそうだけれど」
「フレヴィルさんかしら」
「あの方は文筆家だったと思うけれど」
「そうだったわね、一体誰だったかしら」
そんな話をしていた。ジェラールはそれを部屋の端で客人達を席に案内しながら聞いていた。
「フレヴィル？イタリアからわざわざ来たのか」
彼はそれを聞いて顔を入口に向けた。
「それに詩人も来るのか。どうせいつもの軽薄な奴だろう」
彼はあまり詩というものを好まなかった。貴族の余興程度に思っていた。
マッダレーナは両親と一緒に客人達を出迎えている。ジェラールはそんな彼女をしばし見ていたがやがて視線を離して仕事に専念した。
仕事は順調ではあった。だが忙しい。それは誰もが同じであった。だがジェラール達はすぐにその場をあとにした。他の仕事が入ったのである。
「おい、行こうぜ」
「ああ」
彼は同僚に促されその場をあとにした。
マッダレーナは部屋の端で自分のドレスを見ていた。どうも今一つ気に入らないらしい。
「何か変じゃない？」
ベルシに問うた。
「そうかしら」

彼女は首を傾げた。
「私はそうは思わないけれど」
「そう？」
「ええ。貴女白いのが似合うし」
「いえ、色じゃなくて」
彼女はベルシに対して言った。

第一幕その三

「デザインはどうかしら」
「悪くないと思うわ」
「本当！？」
「ええ、本当」
彼女は素直に答えた。
「ううん」
だがマッダレーナはまだ不満そうである。
「どうしたのよ、今日は」
ベルシはそんな彼女に対して言った。
「ちょっと裾が」
マッダレーナが気になっているのはドレスの裾であったのだ。
「そんなに悪いと思わないけれど」
ベルシはその裾を見て言った。
「私はこんな派手なのはあまり好きじゃないの。無理してまで自分を綺麗に見せて何なるというの？」
「あら、随分我が儘ね」
「そうかしら」
マッダレーナは友人のその言葉にキョトンとした。
「ええ、貴女は充分美しいわ。それに胡坐をかいて努力しようとしないなんて」
「そういうわけじゃないの」
マッダレーナはその言葉を否定した。
「ではどうして？」
「私は着飾ったり宝石で身を包みたくはないの。そんなの普通じゃないわ」
「よくわからないわ」
ベルシはその言葉が理解できなかった。彼女は豪奢なドレスも宝

石も大好きであった。それで実を飾ることは素晴らしいことだと思っていた。だがマッダレーナはそれを喜ばない。かえって不自然にすら思えた。
「こうしたドレスよりも普段着の方がいい。私は窮屈なのも派手なのも嫌いなの」
その顔はあきらかに嫌悪が浮かんでいた。だが彼女はそれをすぐに消した。
「けれど今は仕方がないわ」
そう言って微笑んだ。
「お母様の為にも」
そこで伯爵夫人が戻って来た。とある重要な客人を自ら席に案内していたのだ。王家に縁のある公爵であった。
「綺麗な薔薇を着けているわね」
ふとマッダレーナが頭に着けている真紅の薔薇を見て言った。
「え、ええ」
どうやら母は彼女の内心を知らないようだ。
「よく似合ってるわ。私も一輪欲しい位」
「宜しければお渡し致しますわ」
「いえ、それはいいわ」
彼女は娘の申し出をやんわりと拒んだ。
「その薔薇は貴女に相応しいもの。私なんかには勿体無いわ」
「そうかしら」
「そうよ。若い乙女には薔薇がよく似合うものだから」
「あまりそうは思わないけれど」
マッダレーナはこの薔薇を頭に飾るのも否定的だった。とかく豪奢な装飾は好まなかったのだ。
見れば母は父と共に客人達を出迎えている。そして口々に世辞を言う。
「何と優雅な」
「何と美しい」

「お会いできて光栄ですわ」
全て社交辞令である。それはもう儀式なのであるがマッダレーナはそれも好きにはなれなかった。彼女はそうしたお世辞も好きではなかったのである。
「そんな心にもないことを言ってどうするのかしら」
そうは思っていても口には出せない。それが貴族の世界であった。
ジェラールもこの虚構を嫌悪していたのである。だがマッダレーナの思いとジェラールの嫌悪は全く異なるものであった。彼女はその世界の中にいて彼はその世界の外にいる。それだけで見るものが違うのだ。感じることも違うのだ。
それはマッダレーナにもジェラールにもわからない。人間というのは別の世界のことはなかなかわからないものなのだ。例え注意していても。
マッダレーナもジェラールもその性質が善であることは事実だ。だがそれが人を正しい方向へ導くかというと決してそうではない。逆に誤った方へ導くこともある。
その逆もある。それは人間にはわからない。わかるとすれば神だけである。だがジェラールは神を否定する。
「こうした虚構を作る神なぞ・・・・・・」
仕事を終えた彼は城を去り何処かへと消えた。その行く先を誰にも告げずに。
やがて伯爵夫人とマッダレーナのところにフレヴィルがやって来た。
黒い髪に黒い瞳を持つ派手に着飾った男である。イタリア出身らしい彫の深い顔立ちに見事な着こなしである。伊達男と評判のあるイタリア男だけはあった。
「奥様、お久し振りでございます」
彼はそう言うと恭しく頭を垂れた。その身のこなしも優雅である。
「こちらこそ」
伯爵夫人やマッダレーナも挨拶を返す。だがその優雅さでは彼に

劣っていた。
「私のような軽輩をお招き頂くとは。身に余る光栄です」
「いえ、そんな」
「いえいえ、感激あまり今日は友人と二名連れて来ました」
「お友達を？」
「はい、こちらに」
彼は微笑むと左に控える二人の男を手で指し示した。
「まずはフランド＝フィオリネルリ」
フレヴィルに紹介されたのは中年のやや肥え太った男であった。茶色い髪と瞳を持ちあまり背は高くない。どちらかというと美男子というより愛嬌のある外見、顔立ちである。
「はじめまして」
フィオフネルリはマッダレーナ達に笑顔で答礼した。
「イタリアの貴族にして音楽家であります。遂この前スカラ座で上演したオペラが大好評でした」
「まあ、スカラ座で」
オーストリアのマリア＝テレジアがミラノに建てさせたスカラ座はこの時から欧州で最も権威のあるオペラハウスであった。そこで成功するということは音楽家としての栄誉であった。
「まあどちらかというと音楽家よりコメディアンの方が似合うかも知れませんが」
ここでフレヴィルは冗談を言った。

第一幕その四

「おい、それは酷いぞ」
フィオフネルリはそれを聞き少し怒ったように見せた。勿論本気ではない。声もやはりかん高くユーモラスである。
「ははは、これは失敬。この通り明るくてユーモアのわかる人物です」
「このような底意地の悪い男と付き合っているとそうもなります」
彼はフレヴィルに嫌味を言いながら自己紹介をした。やはり彼はユーモラスな人物である。
「続きましては若き外交官にして詩人」
フレヴィルは続けてもう一人の男を紹介した。
「アンドレア＝シェニエです」
「はじめまして」
シェニエと呼ばれたその男は軽く会釈をした。銀の髪に黒い瞳を持つ細面で端正な顔立ちの男である。その彫のある瞳は優しいが強い光を放っている。あまり背は高くないが姿勢がいいのだろう、堂々としている。そして青いイタリア風の服を着ている。そのタイは赤くそこから白いシャツが見えている。
「・・・・・・・・・・」
マッダレーナはその姿を見て暫し呆然とした。まるで何かに魅入られたかのようであった。
「マッダレーナ」
伯爵夫人はそんな彼女に声をかけた。
「あ、はい」
彼女はそれに気付き不意に言葉を返した。
「挨拶をなさい」
「はい、申し訳ありません」
彼女は慌ててシェニエに挨拶をした。

「申し訳ありません、無作法な娘でして」
「いえいえ、決してそうは思いません」
シェニエはそれに対し微笑んで返した。
「見たところしっかりした方でいらっしゃる」
「そうでしょうか」
伯爵夫人はシェニエの言葉に苦笑した。
「世間知らずというのなら同意いたしますけれど」
「そんなことはありませんよ。芯は非常に強いと見受けられます」
「またそんなご冗談を」
「奥様、私は冗談は申しません。こう見えてもかっては軍人でありましたから」
「そうなのですか？」
「はい、海軍におりました」
実は彼の生い立ちは複雑であった。フランスの外交官である父とスペイン系ギリシア人である母との間に生まれた。場所は当時父が赴任していたオスマン＝トルコの首都コンスタンチノープルであった。フランスとはかなり異なった場所、そして状況で生まれ育ってきた。
海軍には幼年学校に在籍していた。だが後に陸軍の連隊に士官候補生として入隊している。そして今は外交官をしている。当時のフランスの貴族社会がそうであったように落ち着かずその才をいささかもてあましていた。そしてその才を詩に向けるようになったのである。
「といっても陸軍にもおりましたが」
彼は微笑んでその経歴を話した。
「あら、それは」
伯爵夫人はそれを聞いて笑った。
「面白い経歴ですわね」
「はい、私自身はつまらない人間ですが」
彼はここでジョークを言った。そこで一人の法衣に身を包んだ男

が入って来た。
「おお、修道院長！」
マッダレーナの父である伯爵がその法衣を着た男の姿を認めて声をあげた。
「伯爵、呼ばれに応じ参りました」
修道院長は伯爵に笑顔で答えた。実は彼はマッダレーナとは縁者である。
「パリから来られたのですね」
「はい」
彼は伯爵夫人に答えた。
「如何でしたか、ベルサイユの様子は」
「それですが」
彼はここで表情を暗くした。
「何かあったのですか？」
「それが・・・・・・」
明らかに何かがあった。その証拠に修道院長の顔はどんどん暗くなっていく。
この時フランスの置かれている状況は厳しいものであった。財政は破綻し国王ルイ十六世には国政を舵取りする能力はなかった。そして貧富の差は隔絶たるものがあった。
ここで問題となｒのはフランスの土地である。欧州の土地は痩せている。欧州第一の農業国であるフランスですら常に餓死者を出していた。我が国はこの時江戸時代であったが三回大きな飢饉を経験している。宝暦、天明、天保の三回である。特に天明の時の東北の事情は悲惨としか言いようがない。だが一説には人口は殆ど減らなかったらしい。それだけの力が東北にもあったのである。
だがフランスは違う。パリは東北よりも北にある。冬には豪雪が襲いセーヌ河は凍りつく時もある。それ程までの気候差があるのだ。東北には凍る河はない。雪はあっても全てを凍らせるものではない。
フランスの豊作の時の餓死者はその天明の時の餓死者より多いの

である。フランスの豊作とは当時の我が国では大飢饉であった。
そうした状況でも貴族達は優雅に宴を開いている。今テーブルの上にある極上の葡萄酒や豪華な鴨や鹿の料理などとても庶民の口には入らない。
こうした問題が何故放っておかれたか。誰も問題とは思っていなかったからである。その為ルイ十四世もベルサイユに宮殿を建てた。彼は別に国民から搾取しようともその生活を苦しめる為にそのような宮殿を建てたり優雅な生活を楽しんだわけではない。彼は自分自身を国家だと言った。国家は常に輝いていなくてはならない。彼も彼なりに国民を深く愛していた。そしてその期待に応えなければならないと常に思っていたのだ。
それは貴族達も同じであった。彼等も自分の領地の民を愛してはいた。中には暴虐な人物もいたかも知れない。だがそのような輩は常にほんの一部である。そうした者ばかりなら歴史は実に単純に話が進む。もう読まなくてもよい程だ。だが歴史は悪意よりも善意や理想で動くものだ。それが現実にどのようにして変わるかは別として。

第一幕その五

そうした問題を問題を考える者が現われるようになった。俗に言う啓蒙思想である。それは知識人達の間に急激に広まっていった。

しかしいささか現実と遊離した一面もないわけではなかった。ルターのいう『自然に帰れ』であるが現実には不可能である。その為この時代の啓蒙専制君主と呼ばれる者達、サンスーシーの隠者と呼ばれたプロイセンのフリードリヒ大王やロシアの女帝エカテリーナ、オーストリアの若き君主ヨーゼフ二世等であるがそれを実際に政治にとりいれようと試みたのはまだ若いヨーゼフ二世だけであった。だが彼は聡明であったのでその間違いにも気付いたか軌道修正をしている。他の二人は学問として学んだ程度である。

しかしこの言葉が一人歩きしていく。共産主義にはこの言葉が残っていた。そして二十世紀それに影響された進歩的思想がルターとほぼ同じことを主張する。反文明、反文化である。それは悲劇となった。特にポル＝ポトの狂気は人類の歴史に永遠に残るであろう。

だがそうだからといって啓蒙思想が悪いわけではない。実際にその問題を知らしめし人々に見せたのであるから。ジェラールが好んで読んでいるのも彼等の書である。彼はなかなか学識のある男であった。

「あまりお話したくはないのですが」

修道院長はそう言って話すのを拒もうとした。

「それはいけませんわ」

伯爵夫人がそれを拒んだ。

「そうです、皆聞きたがっていますわよ」

マッダレーナも言った。見れば他の客達もである。

ただシェニエだけは違っていた。彼はそれを一人無表情のまま見ていた。

「よろしいですか？」

修道院長は暗い顔のまま一同に問うた。
「是非お願いします」
彼等は口々に言った。彼はそれを見て意を決した。
「後悔しませんね」
彼はそれでもそう前置きした。
「ええ」
一同は答えた。院長はそれを見て決めた。
「ではお話しましょう」
見ればこの部屋にいる者全員集まっている。そして彼の話に耳を傾けている。
「王室の権威は近頃翳りが見られます」
「やはり」
「陛下に良くない忠告をした者がおりまして」
「ネッケルでしょうか？」
誰かが尋ねた。財務長官である。
「それは残念ながら」
院長はそこまでは言おうとしなかった。
「いえ、仰らずとも」
誰かが言った。勘のいい者や宮廷に明るい者ならばすぐにわかることであった。
「私の口からはそれは言えません」
院長はそれでも彼の名は言わなかった。
「そして第三階級ですが」
「彼等が！？」
所謂庶民のことである。といっても議会にいるのは裕福な家の出身や啓蒙思想の影響を受けた者が多かったが。三部会といってもやはり文字の読める程度の知識がなければ出席も発言もままならなかったからである。当時のフランスの識字率は非常に低かった。
こういった話がある。鉄仮面という男が牢獄に捕われていた。
彼の正体についてはいまだに色々と議論されている。ルイ十四世

の縁者ではないかという噂があるが定かではない。デュマは小説にもしている。だがこれはという確かなものはない。
その鉄仮面が牢獄から一通の手紙を落とした。誰かに自らの身の上を知ってもらい助けてもらう為だ。その手紙を一人の漁師が拾った。
すぐにその漁師のところに人が来た。何と鉄仮面が捕われている牢獄の監獄長自らやって来たのだ。
「御前は手紙の中身を見たか？」
彼は怖い顔をしてその漁師を問い詰めた。
左右には兵士達が控えている。剣呑な気配だ。
「いえ」
漁師は答えた。
「読むも何も私は字が読めないものでして」
それを聞いた監獄長はこう言って微笑んだ。
「御前は運がいい奴だ」
彼がもし字が読めていたら確実に殺されていただろう。この漁師は思わぬところで命拾いをしたのだ。
「彼等は大変なことをしています」
「何をしているのですか？」
皆院長の言葉から耳を離せない。
「あれは非常に怖ろしいことでした」
彼はそれを話すのを躊躇していた。だが話さないわけにはいかなかった。
「何ですか、教えて下さい！」
皆がそれを許さないのである。彼は止むを得ず話しはじめた。
「アンリ四世陛下の像が汚されました」
「何と怖ろしいことを・・・・・・」
アンリ四世とはこのブルボン朝の創始者である。ヴァロワ家が断絶したのでその縁者である彼があとを継いだのである。この時代彼は神にも等しい存在であった。

「彼等は神をも怖れぬのでしょうか」
「はい、彼等の中には神を否定している者もおります」
「信じられない・・・・・・」
この時代から無神論者もそれを主張するようになった。フリードリヒ大王もそうであったが特にこの時にフランスの啓蒙思想家には多かった。
「では彼等は何を信じているのでしょう」
「理性だと彼等は言います」
「そんなものが何の役に立つと・・・・・・」
それを聞いたシェニエは少し目を向けた。何か言いたげであったが誰も気付かなかったしシェニエ自身も人にまで聞かせるつもりはなかった。
「まあ深刻な話はそれまでにしましょう。折角の宴なのですし」
院長はそこで話を強引に打ち切ってしまった。
「フレヴィルさん、貴方もそう思うでしょう？」
そしてそうした場を盛り上げることに慣れているフレヴィルに話を振った。
「ええ」
彼は微笑んでそれに応えた。そして皆の前に出て来た。

第一幕その六

「皆さん、今日は折角お来しいただいたのです。存分に楽しみましょう！」

そう言うと指を鳴らした。すると若い羊飼いの姿をした少女達が出て来た。

「これは私の余興です。太陽と花々の中羊飼い達の歌う牧歌を聴こうではありませんか！」

当時田園風の別荘や音楽が貴族達に親しまれていた。華やかな宴だけでは人の心は癒されない。そうしたものも必要なのであった。

少年達も姿を現わした。フレヴィルは彼等の中央に立った。

「さあ皆さん、お聴き下さい、清らかな牧童達の声を」

そう言うと子供達は歌いはじめた。綺麗な声をしている。特に少年達のそれは素晴らしかった。

カストラートという。声変わりの前に去勢してその声を保った歌手である。彼等はそれであったのだ。

このカストラートがバロック、そしてロココの時代の音楽を支えた。特に有名なのはファルネッリであるがその他にも大勢の有名なカストラートがいた。

モンデヴェルディもモーツァルトも彼等の為に曲を作った。そしてそれは今でも残っている。ロッシーニもカストラートの音楽を愛した。後にワーグナーはカストラートを参考にして自作の楽劇に不思議な声を発するバスの役を出している。カストラートのいない今ではメゾソプラノやカウンターテノールにより歌われている。今もなお彼等の素晴らしい芸術は生きているのである。人権やそうしたものとは別の次元の話である。

「何と素晴らしい」

流石はその名を知られた人物である。フレヴィルの歌はそこにいる全ての者を魅了し感動させた。それが終わった時彼は拍手の嵐に

包まれた。
「いや、素晴らしい」
先程まで陰鬱な表情に陥っていた院長が満面に笑みを浮かべて握手を求めてきた。
「気に入っていただけたようですね」
フレヴィルは彼の顔を見て言った。
「当然ですよ。噂に聞いただけはあります」
「本当に。まさかこれ程までとは」
人々は口々に彼を称えた。
「いえいえ、そんなによかったとは自分では思っていませんが」
彼は謙遜の言葉を口にしたがその顔には会心の笑みがあった。
「本当にお見事でしたわ」
マッダレーナも賛辞の言葉を送った。
「ところで」
そしてシェニエに顔を向けた。
「今度は詩をお聞きしたいのですが」
彼に対して詩を所望した。
「生憎今は思い浮かびません」
「あら、どうしてですか？」
「才能がないものでして」
「あら、ご謙遜を」
「今はミューズの声が届かないのですよ」
彼は微笑んで答えた。
「ははは、彼はいつもこう言うのですよ」
ここでフレヴィルがマッダレーナに対して言った。
「偏屈なところがありまして。それにありふれたものに対しては心を動かさないですし」
「なあ、そうですの」
「私のミューズは身持ちが固いのです」
シェニエは軽く受け流すように言った。

「それは一理ありますな」
ここでフィオリネルリが入ってきた。
「あまりにも力をお与えになるミューズはあまり有り難くありません」
「よくわかっておられますね」
シェニエはそれを聞いて答えた。
「けれど残念ですわ」
マッダレーナはそれを聞き口を少し尖らせた。
「折角素晴らしい詩が聞けると思いましたのに」
彼女は芸術へは関心が高かった。だからこそフレヴィルの歌にも素直に感動したのだ。
「では私今から貴方と勝負致します」
「私とですか？」
シェニエはそれを聞いて眉を少し上に上げた。
「はい。貴方に詩を謳ってもらいます」
「おお、それは面白い勝負ですね」
フィオリネルリはそれを聞いて声をあげた。
「そう思われるでしょう？ならば」
フィオリネルリに対して顔を向けて微笑んだあとシェニエに顔を戻した。
「勝負を申し込みますわ」
「おやおや」
それを聞いた伯爵夫人と他の客達は少し呆れたような声を出した。
「ならば私は」
フィオリネルリは伯爵夫人に何かを言った。
「わかりましたわ」
彼女はそれを聞くと優雅に微笑んで側の者に対して何かを告げた。
その者は頷くと何処かへ消えた。そして暫くして楽器を持って来た。バイオリンだ。
「どうぞ」

「有り難うございます」
フィオリネルリは笑顔で礼を言うとその楽器を手にとった。そして構えた。
「それでは私は」
それを見たフレヴィルも動いた。
「その勝負の立会人となりましょうか」
そう言って二人の中間に立った。
「同じ芸術を愛する者として」
「では貴方へ突きつける一撃目は」
マッダレーナは芝居がかった言葉をシェニエに向けた。
「田園ものをお聞きしたいですわね」
当時のフランス貴族の間で流行った詩のジャンルの一つである。
その田園風の別荘と共にロココを代表するジャンルであった。

第一幕その七

「田園ものですか」
「如何でして？それが駄目でしたら」
マッダレーナは言葉を続けた。
「尼僧か花嫁に捧げる愛の詩でもいいですわよ」
これも当時の詩の定番であった。
「ふむ」
シェニエはそれを聞いて考える顔をした。
「マドモアゼル」
そして彼は表情を元に戻すとマッダレーナに対して言った。
「大変有り難い申し出ですが詩情というのは指図や求めに応じて出て来るものではありません」
「あら」
マッダレーナはそれを聞いて悪戯っぽく答えた。
「詩情とは何時出て来るか全くわからないものなのです。大変気紛れです。そう」
彼はここで言葉を一旦とぎった。
「恋のように」
「うふふ、恋みたいにですか！？」
マッダレーナはそれを聞いて思わず笑ってしまった。
「そうです、詩とは恋なのです」
だがシェニエはそれに腹を立てるわけでもなく真面目に答えた。
「それでしたら私にも詩を作れるということになりますわよ」
「その通りです」
やはりシェニエは冷静なままである。
「誰もがその胸の中に詩を持っているのです」
「そうなのかしら」
マッダレーナはそれを聞いて違和感を覚えた。

彼女は詩は芸術だと思っている。それは限られた人だけが持ち得るものなのだ、少なくとも彼女はそう考えている。だがシェニエは違うようだ。彼はそれは誰もが持っているものだと言う。
「それでしたら」
彼女はここで意地の悪い質問をすることにした。
「誰でも、そう例え異教徒ですらも詩を作ることができると仰るのですか？」
「当然です」
「何と・・・・・・」
皆それを聞いて少しざわついた。
「私はコンスタンチノープルで生まれました」
あえてキリスト教風の呼び方で街を呼んだ。
「そこで私は多くの美しいものを見ました」
「本当ですか！？」
マッダレーナはそれを聞き驚いた。実は彼女はフランスから一歩も出たことはなかったのである。
「はい。そして多くの美しい詩も知りました」
昔からイスラムでも詩は深く愛されてきた。宮廷詩人フィルドゥーシーもいた。だがそれをキリスト教徒達は偏見により見過ごしていたのだ。フランスの民話ではイスラム教徒達は皆野蛮で残忍なものとして書かれている。だがこれこそが偏見なのだ。実際はむしろ彼等の方が野蛮で残忍であった。十字軍もそうであったし異端審問のような酸鼻を極めるおぞましい組織もあった。少なくともイスラム教徒達はそのようなことはしない。
「嘘みたい」
「嘘ではありませんよ、マドモアゼル」
シェニエは疑おうとする彼女に対して言った。
「その証拠に遠く中国の詩も我々は愛しているではありませんか」
この時代にも漢詩は伝わっていた。そしてそれを知る人々はそれを愛した。

「人の心は皆同じなのです。たとえ貴族でも庶民でも」
「そんな筈は・・・・・・」
ここにいる者達は皆貴族である。青い血が流れる者達である。その彼等が自分達を庶民と同じと言われて気分がいい筈がなかった。
「それはいづれわかることです。必ず」
「・・・・・・・・・」
皆その言葉に沈黙した。そして先程の修道院長の言葉を思い出した。
「怖れることはありませんよ。真実というものは必ず明らかになるものなのです」
彼はそう断ったうえで話を続けた。
「私は神を信じます。ですが」
その言葉はまるでそこにいる者達の心に対して語りかけているようであった。
「その神は束縛を好まれません。愛と自由を好まれるのです」
「愛と・・・・・・」
「自由を」
皆その言葉を繰り返した。マッダレーナもである。
「はい、それこそが神の教えです」
シェニエはそう言って微笑んだ。
「その神は時として私に授けて下さるものがあります」
「それは？」
「それはミューズを通して授けられます。それこそが詩情なのです」
「そうなのですか」
「はい、そして今それが授けられました」
シェニエは穏やかな声で言った。
「それを今から皆さんにお伝えしましょう。神の授けて下さったものを」
そう言うとゆっくりと構えた。左手の拳を胸に持って来たのだ。
「ある日私は青い空に見惚れていました」

彼は詩を口にしだした。
「スミレの花が咲き誇り太陽の黄金色の雨が降り注ぐ中見ていました」
詩を続ける。
「大地はその恵みを受けた巨大な宝であり空はそれを包んでいます。それについて考えていた時大地が私にあるものを授けてくれました」
「それ何でしょうか？」
人々は問うた。
「それこそが愛でした。そして大地は私に教えてくれたのです。私が愛し、愛するものはこの美しい祖国であると」
「祖国・・・・・・」
「はい。私はコンスタンチノープルで生まれました。しかし心はフランスに常にありました」
彼は言った。確かに母はフランス人ではない。だが彼の心はフランスのものであったのだ。

第一幕その八

「そう教えられた私は教会に向かいました。そう、その祖国と、そしてそれを守り給う神に祈りと感謝を捧げる為に」
「神に」
「はい、ですが私はそこであるものを見ました」
「それは！？」
「それは醜い光景でした。着飾った司祭は神に捧げ物をしていました。ですが教会の横で老人がパンを求めて震える手を差し出しているのには目もくれていなかったのです」
「それは私達のことか」
修道院長と他の僧侶たちはそれを聞き顔を青くさせた。シェニエはそれに構わず詩を続けた。
「次に私はあばら家の敷居を幾つかまたぎました。その中でも皆働いていました。皆みすぼらしい格好をしておりました」
「何と・・・・・・」
「私は聞きました、彼等の声を」
「彼等は何と言っていましたか！？」
人々は問うた。
「彼等は叫んでいました、そして泣いていました。幾ら働いても国の懐が食い潰してしまうと。神を罵り、自らの持つ地を罵っておりました」
「それはまさか・・・・・・」
何人かは気付いた。それは今のフランスの民衆なのだと。
「ですが青い血の人々は今何処にいるでしょうか？マドモアゼル」
そしてマッダレーナに顔を向けた。
「私は貴女の眼に天使を見ました。澄んだ純粋な憐れみを」
「純粋な憐れみ・・・・・・」
マッダレーナはその言葉を繰り返した。

「そうです、私は貴女の中にそれを見ました」
シェニエは優しい声で言った。
「どうか私の言うことを軽蔑しないでいただきたい。そして愛を知るのです」
「愛を・・・・・・」
「そうです、貴女は愛をまだ知らない。それはこの世で最も尊いものなのです」
「それはよく聞きますが」
「聞くだけでは駄目なのです、感じられるようにならないと。愛とは神がお与えになるものでこの世の全てなのです！」
彼は最後は少し叫んでいた。マッダレーナはそれに言葉を失った。
「マッダレーナ」
伯爵夫人がそんな娘に声をかけた。
「あ、はい」
彼女はその言葉に我に返った。
「少し休んでらっしゃい」
そして娘に席を外すよう言った。
「わかりました」
彼女はそれに頷くとその場をあとにした。
「やれやれ、まだまだ夢見る年頃ね」
彼女は母親の顔でそれを見ていた。
「愛を知らないなんて。愛とはそれはそれは美しいものなのに」
「・・・・・・・・・」
シェニエは彼女にも何か言いたそうであったが言わなかった。そこでガヴォットの前奏が聞こえてきた。
「さあ皆さん、今度はガヴォットですわよ」
伯爵夫人は客人達に対して言った。
「宴に相応しい陽気なガヴォットを。皆さん、今夜は踊りあかしましょう！」
「はい！」

皆立ち上がった。そしてそれぞれペアを組むと踊りの輪を作ろうとした。その時だった。
不意に騒ぎ声が聞こえてきた。
「あれは！？」
皆踊りを中断した。ガヴォットも止み皆その声に耳を向けた。それは人々の声であった。
「昼も夜もない、いつも俺達は飢えて苦しんでいる」
何か呪詛するような声が聞こえてきた。
「ここにも波が押し寄せてきたか」
シェニエはそれを聞いて呟いた。
「お偉い方々が酒と御馳走に囲まれている時に俺達は冷たくて固い一欠けらのパンをかじっている。そして明日は水しかないという毎日さ」
それはあきらかに貴族達を呪詛する声であった。声は次第に近付いて来る。
「これは一体何事ですか！？」
伯爵夫人は血相を変えてやってきた家令に対して問うた。
「はあ、実は・・・・・・」
家令は真っ青になっている。その言葉もしどろもどろだ。
そうこうしている間に声はすぐ側までやって来た。扉を開き中に入った。
それは民衆達であった。彼等はみすぼらしい服を身に纏い貴族達を恨めしい目で見ている。
その先頭にはジェラールがいた。彼は憎悪に満ちた目で貴族達を見据えている。
「ジェラール、これはどういうことですか！？」
伯爵夫人は彼を睨みつけて問うた。
「彼等の姿を御覧下さい」
ジェラールは主人に対して言った。強い声で。
「私は彼等の声を聞いたのです。真の人々の声を」

「確かに」
シェニエはそれを聞いて呟いた。
「今まで貴女に与えられた服も、パンも忌まわしいものだった。私は奴隷ではない」
「私が貴女を何時奴隷だと言いました！？」
彼女には身に覚えのないものだった。怒りで顔を青くして問うた。
「その鈍い心ではおわかりになりますまい、永遠に」
ジェラールはそれに対し言い切った。そこに使用人達がやって来た。
「同志達よ、君達もこのままでよいのか」
だが彼は自らを追い出そうとした同僚達に対して逆に問うた。
「え・・・・・・」
彼等はそれを聞き思わず立ち止まった。
「君達は奴隷のままでいいのか、人間なら自らの足で立ち自らの手でものを掴みたくはないのか！？」
「それはどういう意味だ！？」
だが彼等にはジェラールの言っていることがわからなかった。ジェラールはそれに失望するかに思えたが違った。
「いずれ君達にもわかる」
「かなり一途な男だな」
シェニエはそれを見て再び呟いた。
「だが少し視野が狭いな。それが危険だ」
しかしその言葉はジェラールの耳には入らない。そこへ一人の老人がやって来た。

第一幕その九

「カルロ、よさないか」
それはジェラールの年老いた父であった。
「御前はどうかしている。今までの御主人様や奥方様のご恩を忘れるとは何事だ」
その声は弱々しいものであった。
「お父さん」
彼は父を見て優しい声で言った。
「一緒に行きましょう、人間としての正しい道を。我々は今から新しい世界に足を踏み入れるのです」
「何を言っておるのだ、馬鹿なことは言うでない」
「馬鹿なことではありません、私は正気です。その証拠に見て下さい、この欺瞞に満ちた世界を」
彼はそう言うと父にこのシャンデリラに照らされた部屋を見せた。
「民衆が飢えて死んでいくのにここにはこれだけの酒と食べ物がある。そして光が灯り宴が連日連夜繰り広げられている。これを欺瞞、いえ背徳と言わずして何と言いましょう」
「・・・・・・・・・・」
父は答えられなかった。ジェラールはそんな父に対し言葉を続けた。
「そうした世界が終わる時が来たのです。我々は今その世界から解き放たれたのです」
「だが一歩間違えればその足は地獄に向かう」
シェニエの独り言は誰の耳にも入らない。だがもし誰かが聞いていたとしてもその意味はわからなかったであろう。
「その証がこれだ！」
ジェラールはそう言うと自らの着ていた制服の上着を脱いだ。そして床に叩き付けた。

「今から俺の着る服はこれだ！」
そして民衆の貧しい服をかわりに纏った。
「忌まわしい束縛よ、消えてなくなれ！俺は自由と平等にこの身を捧げる！」
「そうだそうだ、俺達も！」
民衆はジェラールの言葉に賛同した。ジェラールはそれを聞き彼等に顔を向けた。
「諸君、では行くとしよう。自由と平等が支配する理想の世界へ！」
「おお！」
彼等は叫んだ。そしてジェラールと共にその場をあとにした。
「何ということ・・・・・・」
伯爵夫人は蒼白になったままその場に崩れ落ちた。
「何が不満だというの！？」
彼女は魂が抜けたような声で呟いた。
「食べ物は白いパンだったし文字も教えてあげた」
当時白パンは御馳走であった。庶民の食事といえば黒く固いパンであった。そして文字も当然読めなかった。
「だから本も読めたというのに」
それは事実だろう。だが彼はその施しを憎んでいたのだ。
「だから恥ずかしい思いをせずに済んだのに。思いやりのしるしとして服まで与えたというのに」
服もである。精々ニ三着持っていれば贅沢であった。食べるものにすら事欠いているのだから。
「それを忘れて何故あのようなことを・・・・・・。私の何処が不満だというの！？」
「この人にはおそらくわからないだろうな」
シェニエは彼女を見ながら呟いた。
「いずれわかる時が来るかも知れない。だが来ないかも知れない。それだけは神が定め給もうものだ」
彼は新教徒めいたことを言った。

「あのジェラールというものは神の御教えを先に知ったのだ」
そしてジェラールが行った方へ顔を向けた。
「あの若々しい心がこれからの世界を変えていくだろう」
その言葉は予言めいたものであった。
「しかし」
シェニエはここで言葉をとぎらせた。そして再び口を開いた。
「その心が何処へ行くかまでは誰にもわからない。神以外は」
どうやら予定説の影響を受けているようだ。これもフランスの外でうまれそだったせいであろうか。
「その行く道は一つではない。中には恐るべき地獄の道もある」
彼はそこである人物のことを思い出した。
「ロベスピエールといったな」
若い男である。法律家の家に生まれたが幼くして両親をなくし苦学しながら弟や妹達を養った。そして今やフランスにその名を知られようとしている情熱的な政治家である。
シェニエはその人となりに悪い印象は受けなかった。生真面目であり清廉だった。だがそこに彼はロベスピエールの持つ危険性を感じ取っていた。
「人は時として不浄なものも知らなければならない」
それは詩人というより哲学者の言葉であった。
「さもないとその不浄がどういうものか、そしてそれより怖ろしいものについて無知になってしまう」
この言葉を知らない者も多い。ロベスピエールもそうであるし今ここを去ったジェラールもそうだ。彼等が求めているのは絶対的な正義なのだ。神ではないが神性を持つものなのだ。
「彼等がオリバー＝クロムウェルを知っていればよいが」
そして宿敵の国に生まれた一人の男の名を口にした。
オリバー＝クロムウェル。ケンブリッジで宗教を学んだ男である。軍人として優秀であり清教徒革命においてニューモデル軍を率いて王党派の軍を散々に打ち破った。そして革命後国王を処刑し反対派

を弾圧し自ら護国卿となった。
彼もまた清廉潔白で自らに対し厳格であった。だがそれは他者に対する絶対的な不寛容ともなったのである。
彼にとって清教徒の価値観こそが全てであった。それにそぐわぬ者は皆敵であった。
法にない国王の処刑もそこに根拠があった。自らに逆らう者達も。旧教徒も。その為アイルランドを侵略した。彼にとって旧教徒は敵でしかなかった。
その政治は圧政であった。日常の生活にまで細かく口を挟み英国は鉄の鎖に束縛された国となった。それは彼の死去まで続いた。
「あのようにならなければよいが。いや」
彼はここで危惧を覚えた。
「より怖ろしいものになるかも知れない」
不幸にしてその危惧は的中する。
だがそれをこの時知っているのは誰もいなかった。伯爵夫人はようやく起き上がり家令に声をかけた。
「もう行ってしまいましたね？」
ジェラール達のことを問うた。
「はい。如何致しましょう」
「・・・・・放っておきなさい」
彼女は沈んだ声で言った。
「それよりも宴を再開しましょう」
「わかりました」
こうして宴は再開された。だがそれは暗く沈んだものになってしまっていた。

第二幕その一

第二幕　パリ

あの宴から五年が過ぎた。革命が起こりフランスは大きく変わっていた。

第三身分が大きく力を伸ばしその束縛を断ち切った。そして貴族は没落し全てを、そう命さえも失った。幸運な者は物乞いや娼婦に身を落とすか海外に亡命した。

パリの貴族達は次々とフランスを、いやこの世を去った。断頭台が連日に渡って落ち血を吸っていた。

革命を叫ぶ者達が議会を支配し穏健派をも弾圧していた。国王も王妃も処刑され今度は同じ思想を共有する者達をも断頭台に登らせていた。

「殺せ！殺せ！」

人々の声が木霊する。そして冷たい刃が落ちる。そして人々は革命の名の下に『革命の敵』の首に罵声を浴びせる。

「これ程までに酷い世界になるとはな」

シェニエはパリにいた。外交官の職はなくなっている。今は詩人として生活の糧を得ている。

彼は処刑場にいた。今日もまた断頭台が落ちた。

処刑されたのは貴族達だけではなかった。今政権を握るジャコバン派に範反対するジロンド派も処刑されている。彼等もまた共和主義者だというのに。

「ジロンド派を弾圧するだけでも異様だというのに」

今彼の目の前で一人の男が断頭台に登った。

「裏切り者を殺せ！」

人々は彼の姿を認めて言った。

「これが革命か！」

断頭台に登ったその男は叫んだ。

「彼は・・・・・・」
シェニエはその男の姿を見て気付いた。彼もまたジャコバン党員であったのだ。
ジャコバン派。ロベスピエールに率いられた急進的な共和主義者達であり神を否定しその代わりに理性を崇拝する者達である。そう、理性をである。
「これが理性というものか」
シェニエは断頭台とそこに群がる人々、そして今断頭台にかけられようとしているジャコバン党員を見て呟いた。
「ロベスピエール！」
その男は両手を兵士達に後ろから掴まれながら叫んだ。
「貴様は悪魔だ！冷酷な死神だ！」
「五月蝿い！さっさと死ね！」
「そうだ、貴様はフランスの敵だ！」
人々がさらに罵声を浴びせる。そして彼はその中で断頭台に入れられた。
「ふん、こうなっては仕方がない！」
彼は断頭台になけられながらもまだ叫んでいた。
「だがな」
そして叫ぶのを続けた。
「今ここで俺を嘲笑っている連中もいずれ俺の後を追う。皆革命の名の下に死ぬこととなるのだ！」
それが彼の最後の言葉であった。彼の首にその巨大な刃が落ちた。
血が流れた。首筋からほとぼしり出た。
「かなり激昂していたからな」
シェニエはそれを見て呟いた。普通首を切られた場合首からはあまり血は流れない。死への恐怖の為顔から上に血が回らないからだ。
だがこの男は違った。それが死を前にして彼がそれだけ怒り狂っていたかを示すことになった。
「またジャコバン党員が一人死んだか」

シェニエはその党員の首を見て言った。
「これで一体何人目なのか」
もう覚えてもいなかった。ある者は今の男のように怒り狂い、またある者は何も語らず死んでいった。
「今度は誰か」
彼はふと思った。
「ダントンかカミュか。それとも」
言葉を続けた。
「ロベスピエール自身か」
それを聞いた周りの者が彼を不審な目で睨んだ。
だが彼はそれには意を介さなかった。そして踵を返して処刑場を後にした。
「死ね、アバズレ！」
今度は女性を罵る声がする。
「今まで散々俺達から搾り取りやがって。今度は御前の命を搾り取ってやる！」
「そうだ、とっとと死にやがれ！」
今度は貴族の婦人らしい。だがシェニエはそれを見るつもりはなかった。そのまま刑場を後にした。
「今まで彼女達を蝶だの花だの賛辞を送っていたというのに」
だが彼は歩きながら呟いた。
「今では罵声を浴びせるか。それが理性というものなのだろうか」
哀しい声であった。だがそれを聞いた者はいなかった。
これが今のフランスであった。外では他の国々と飽くことなき戦いを続け内ではこうして血の粛清が行なわれる。最早この国で血が止まることはなかった。
「号外、号外だよお！」
新聞売りが盛んに人々に叫びたてる。
「また革命軍が勝ったぞお！」
シェニエはふとその新聞を買った。見ればフランス軍はその圧倒

的な兵力を以ってオーストリアやプロイセンの軍をまたしても打ち破ったという。
「また勝ったか」
フランス軍は連戦連勝であった。これは徴兵制により他の国々に増して兵力を集められるからであった。フランス軍はその圧倒的な兵力で以って戦いを有利に進めていたのだ。
「だがこれにより多くの者が死んだ」
フランス軍の戦い方は犠牲を恐れなかった。兵士はすぐに多量に手に入る為幾らでも使い捨てにすることが出来た。実際にそうしなければ勝てないところもあった。
「それにより革命は守られる、か。多くの血が流れて」
バスチーユが襲撃されてから多くの出来事があった。だがその殆どが流血の惨事であった。
バスチーユもそうであった。興奮した群集がバスチーユに雪崩れ込み監獄長を虐殺したのが真相であった。シェニエはジャコバン派の宣伝を嘘だと知っていた。
国王も王妃も処刑された。どれも裁く法がないのに、である。
「王妃へのあれはどういうことだ」
シェニエの顔は歪んだものになった。忌まわしい、汚らわしいものを見た時の顔に。
王妃マリー＝アントワネットはオーストリア出身である。その母は偉大なるオーストリア中興の祖マリア＝テレジアである。父は神聖ローマ帝国皇帝フランツ＝シュテファン＝ロートリンゲンであった。彼女はその両親の愛を受けて育った。
思いの他要領がよく子供の頃はあまり勉強をしなかった。その為学問には疎かったが頭の回転は早い女性であった。
しかしそれは夫を助けるものではなかった。
「確かに彼等は浪費しただろう」
連日連夜の舞踏会、それを彩る宝石や衣装。どれもがみらびやかなものであった。

「だが彼等は果たして断頭台に登るようなことをしただろうか」
彼はここでもジャコバン派の言うことを信じてはいなかった。
王妃の裁判の際彼等は王妃に冤罪を被せた。それも王妃が自らの子に淫らなことを教えたという破廉恥極まる冤罪をだ。それを聞いたシェニエは人知れず憤慨した。

第二幕その二

「許されることと許されざるものがあるとすれば」
彼はまた呟いた。
「そうした破廉恥漢達だ。国王や王妃ではない」
彼の耳にあの言葉が甦ってきた。
「フランスの民達よ、私は罪なくして死んでいく！」
国王の最後の言葉であった。そして彼は死んだ。
「罪はあっただろう。しかし」
彼はふと顔を上げた。その先には議会がある。
「死に至る罪ではなかった。死に至る罪を負うべき者達は」
その目の光が強くなった。
「言うまでもない」
そして彼はテュイルリーの公園の方へ向かった。
「おい、掃除はちゃんとしとけよ」
ペロネ橋である。セーヌ川の上にかかるパリ市民の貴重な場所である。
ここには今一つの胸像があった。革命の英雄マラーの像だ。
人々はその像を敬っていた。そして汚れはないか気にしていたのである。
そこを様々な人々が行き交う。キザな伊達男や学者と見受けられる男が。その中の一人が新聞を読みながら得意になっている。
「ほれみろ、また勝ったぞ」
見ればフランス軍勝利の記事である。
「我が革命軍は無敵だ。こうして頭の固い貴族達を皆殺しにしてやるのさ」
彼は得意気になって周りを見回した。
見れば道の端には物乞いや娼婦達がいる。彼はそちらの方へ歩いて行った。

「あんた達も嬉しいだろう」
彼等を侮蔑しきった顔で侮蔑しきった声をかけた。
彼等はかっての貴族達である。没落し断頭台は避けられたものの生きる術を知らず今はこうして生きているのである。
「いずれ御前達も断頭台行きだ。それまで精々その落ちぶれた生活を楽しんでおくんだな」
それを聞いて周りの者もせせら笑う。
「どうせなら今ここで成敗してやってもいいんだぜ。そっちの方が楽かもな」
かっては貴族だった物乞い達は身体を屈める。その言葉と嘲笑に何も言えずただうずくまるだけである。
「そうやって惨めに生き恥を曝してな」
彼はそう言うと手に持つ新聞を彼等に投げ付けた。
「そのうち生きていた頃が懐かしくなるからな。断頭台の上でな」
そう言うとまた下品な笑い声をたてた。そして彼はその場を立った。
「何て奴なの。ああした男が大手を振って歩いているなんて」
そこにやって来た娼婦の一人が悔しさに唇を噛みながら言った。見ればベルシである。
「かっては私達に賛辞を送っていた口で今は嘲笑する。人間なんてそうしたものなのね。本当に嫌になるわ」
彼女もまた革命後生きる糧をこうして稼いでいるのであった。
「けれどいいわ。少なくとも私はあそこにいる人達のようなことはしない」
そう言うと上を見上げた。そこには一つの宮殿があった。
五百宮殿。今は議会が置かれているところである。表向きには革命と平等、そして自由の為の公平な話し合いが行なわれている場所である。
しかし実際は違っていた。そこでは血生臭い権力闘争が行なわれ敗者は断頭台へ送られた。貴族達の処刑が決められ流血の匂いが充

満していたのである。
「私は少なくとも人々の血を見て喜ぶようなことはしなかった。今でも」
彼女はそう言うとかっての仲間達に顔を向けた。
「行きましょう、皆。こんなところにいても何にもならないわ。貴方達だって嘲笑を受けたくはないでしょう？」
「・・・・・・・ああ」
「・・・・・・・ええ」
彼等はそれを聞いて立ち上がった。
「私今あるお金持ちの愛人になっているの。それでお金を稼いでいるわ」
娼婦からそうした者に囲われるのはよくある話である。かってはローマ法皇もそうしていた。
「そのお金で少しばかりの宴を開きましょう。皆でお金を出し合って」
「そうだな」
彼等はその言葉に頷いた。
「あの人達はあの宮殿で、戦場で血を楽しんでいるわ。けれどね」
ベルシは宮殿を見たあと仲間達に顔を戻した。
「私達は葡萄のお酒で楽しみましょう。赤いあのお酒で」
「そうだな、今日は久々に宴を楽しもう」
「ダンスをしながら」
彼等は次第に元気を取り戻していた。
「そうと決まれば話は早いわ。じゃあこんなところから早く立ち去りましょう」
「ああ」
こうして彼等はその場をあとにした。
彼等は幸いであった。その後ろを一台の運搬車が進んでいた。
「殺せ！殺せ！」
その車に罵声が浴びせられている。だが彼等はそれを聞くことは

なかった。既に橋のあたりから姿を消していた。
「正義の裁きを受けろ！とっとと死んじまえ！」
また処刑される貴族達であった。彼等は黙って民衆の罵声を受けていた。
中にはジロンド派やジャコバン派もいる。彼等もまた宮殿の血生臭い戦いに敗れた者達であった。
「君達もいずれわかる」
その中の一人がポツリと呟いた。
「だがその時には」
誰にも聞こえない声だった。だが彼は言わずにはおれなかった。
「君達はこの世には生きてはいないだろう」
そう言うと口を開くのを止めた。車は馬に引かれその場を去っていく。
「また断頭台がその喉を潤すのか」
それを見ていた一人の男が呟いた。
「あれだけの血を飲み干しているというのに」
彼はベンチに座っていた。そしてそれを見ていた。
そこへ誰かがやって来た。
「濃い茶色の服とコートを着て黒のズボンを着た銀色の髪の男か」
何やらこそこそとした様子である。
「あいつか」
彼はベンチに座るその男を認めると懐から何かを取り出した。見れば人相書きである。
「間違いないな、あいつだ」
彼はそう呟くと物陰へ隠れた。
「アンドレア＝シェニエ。要注意人物だな」
そして物陰に隠れながら辺りを見回した。
「見たところベルシはここにはいないか。少し遅かったかもな」
残念がったがそれはほんの一瞬であった。彼はシェニエに視線を戻した。

「見ていろ、絶対に尻尾を掴んでやる」
彼は密偵であった。ジャコバン派はこうした者達をパリに放って革命の敵とみなし得る者達を監視し探し出していたのだ。これが平等と自由を謳った革命の実態であった。
シェニエは彼に気付いているのかいないのか。ただベンチに座っているだけであった。誰かを待っているのであろうか。密偵がそう思った時であった。
「む！？」
誰かがシェニエに近付いてきた。
「あれは」
見れば若い男である。品のいい顔立ちをした長身の持ち主である。地味なコートに身を包んでいる。
「シェニエ」
彼はシェニエを認めるとその側へ来た。
「やあ」
彼はそれを聞くと顔を上げた。
「ルーシェ、久し振りだね」
「挨拶はいいよ」
だが彼はそれに対し首を横に振った。
「今はそんな時じゃない」
ルーシェはそう言うとシェニエに顔を戻した。
「今の君の立場を考えるとね」
彼はシェニエの友人だった。今はこの街に密かに潜伏していたのだ。
「あれはルーシェか？また大物が来たな」
密偵はルーシェの姿を認めて呟いた。彼もまたジャコバン派に目をつけられていたのだ。

第二幕その三

「君を探していたんだ」
「また大袈裟だね」
ルーシェは傍目にもわかる程焦っていた。だがシェニエはそれに反して冷静であった。
「何を言っているんだ、僕は君を助けに来たんだ」
「私をかい？」
「そうだ、これを持って来た」
彼はそう言うと懐から何かを取り出した。それは一枚の紙であった。
「これを君にあげるよ」
「これは・・・・・・」
シェニエはその紙を手にとって見た。
「通行証か」
「そうだ、ロンドンまでのね。これを持ってすぐにパリを発つんだ」
当時ロンドンは亡命貴族達の避難場所であった。
「偽名を使ってか」
彼は通行証を見ながら言った。そこに彼の名はなく別の名が書いてあった。
「そうだ、わざわざ君の為に用意しておいたんだ。これならあの執念深いロベスピエールとその取り巻きに見つかることもないだろう」
ロベスピエールは特に執念深いわけではなあkった。ただあまりにもその頭脳が鋭利に過ぎたのだ。
「逃げろ、というんだね」
「そうだ、当然だろう。君は自分の置かれている立場がわかるだろう！？」
「勿論だ。しかし」
「しかし！？」

「悪いがこれは君が使ってくれ。私はこのフランスに、そしてパリに残る」
「な・・・・・・」
ルーシェも流石にその言葉には絶句した。
「シェニエ、君は気でも違ったのか！？」
「何を言っているんだ、私は正気だよ」
彼は澄ました声で答えた。
「正気の者がそんなことを言うものか、君もどれだけの人々が革命の敵という訳の分からない理由で断頭台へ送られてきたのか知っているだろう！」
「当然だ。しかし」
「しかし、何だ！？」
「私はあるものを信じているんだ」
「神か！？」
彼はシェニエの信仰心を知っていた。
「うん。神は全ての者にそれぞれ運命を授けて下されている」
「予定説か。カルヴァンだな」
「ああ。私はカトリックだけれどこの予定説には多いに共鳴しているんだ」
「少し変わっていると思うがね」
「それはいいさ。信仰は一つじゃない」
それが彼の信念であった。
「神秘的な力で人々はその運命に導かれている。時には導き、時には迷わせるが。そしてその運命は言うんだ。ある者には軍人になれ、ある者には詩人になれ、と」
「そして君は詩人になった」
ルーシェはそれを聞いて言った。
「そうだ。そして私は今その運命に従いこのパリに留まっている」
「その運命とは何だい！？」
「ここに私が求めているものがあるんだ」

「しかしだ」
ルーシェはそんな彼に言葉を浴びせた。
「その求めているものが来なかったら君はどうするつもりなんだい！？」
「その時は決まっているさ」
シェニエはその問いに微笑んで答えた。
「行くだけだ。パリを去る」
「今では駄目なのかい！？私が言うように」
「うん。私をこのパリに引き留めている運命、それは恋なんだ」
シェニエは立ち上がった。そしてルーシェに対して言った。
「私は今まで恋を感じたことはあっても恋をしたことはなかった。これは運命だ。巡り合わなければ永遠にやっては来ないものなんだ」
「それは僕も否定しないが」
「そうだろう、私のこの運命に今一人の女性がやって来ようとしている。彼女はその恋と共に私の前を訪れるだろう」
シェニエは言葉を続けた。
「あの美しく、神聖な女が。私は彼女を待っていたんだ。その声が私の心を捉えるのを」
「そうか、それが君の言う運命なのか」
「そうなんだ、その人は私に手紙を与えてくれる。ある時は優しく、またある時は厳しい言葉で。私はその人の愛に震えているんだ。それは一人の若い女性だ」
「よくそれがわかったな」
「私の直感だ。そしてその直感はそれが正しいことを教えてくれている」
それも全て恋の為せる業であろうか。
「私は信じる。そしてその為に全てを捧げよう」
「そうか。そして君は何故ここに留まるのだい！？知ってはいるだろうがここは色々と人目がある」
「その恋がここにやって来るとしたら？」

シェニエは言った。
「まさか」
「これを見てくれ」
シェニエはそう言うと今度は彼が懐から何かを取り出した。それは一通の手紙であった。
「これがその女性の手紙なのかい？」
「そうだ、読んでくれ」
「わかった」
ルーシェは頷くとその手紙を受け取った。そして読みはじめた。
「ここで会うのかい？」
「うん」
シェニエは頷いた。
「ここにその人がやって来るんだ、私に会う為に」
「そうか。だが気をつけるんだ」
ルーシェは厳しい顔でシェニエに対して言った。
「僕はこの手紙に危険なものを感じる」
「危険なもの！？」
シェニエは友の言葉に顔を顰めさせた。
「そうだ、確かにこの筆跡は女性のものだ」
ルーシェはシェニエにその手紙の文字を見せながら言った。
「そして紙からは香りが漂う。薔薇の香りだ」
それはその手紙の持ち主が高貴な生まれであるか裕福な育ちであることを示していた。
「だがその裏いは革命の火薬の匂いがする」
「革命の！？」
「そうだ、革命のだ。僕はここに罠があると見るね」
「まさか」
シェニエはそれを否定した。
「いや、よく見てくれ。そして感じてくれ」
ルーシェはまだシェニエに言った。

第二幕その四

「僕は嘘は言わない、これは神に誓おう」
彼もまた正直な男であった。
「この手紙の出所はある小さなサロンだ。何か退廃的な匂いがする。そしてその裏に僕は火薬の匂いを感じたんだ」
「それは君の杞憂だ」
「いや、僕はそうは思わない」
彼はそう言うと首を横に振った。
「君の運命は今虎の牙の中にある。すぐにそこから逃げ出すんだ。さあ、この通行証を手にとって」
そして再びその通行証を手渡そうとする。
「いや、私はそんなことは信じない」
しかしシェニエはそれを受け取ろうとしなかった。
「君が信じる、信じないの問題じゃないんだ、僕は君を救いたいんだ」
ルーシェは無理にでもその通行証を渡そうとする。しかしシェニエはそれを受け取らなかった。
「このパリがどんな街か君も知っているだろう」
ルーシェは言った。
「昔から酒と淫らな宴が支配してきた街だ。浮気な女がそいじょそこらにたむろしている」
「だが彼女は違う」
シェニエはその言葉を否定した。
「違わないさ、だが僕はそれを君に見せようとは思わない」
そして言葉を続けた。
「君にこの通行証を受け取ってもらうだけだからね」
「だからそれは受け取れないと・・・・・・」
「頼む、これは僕の命なんだ」

ルーシェは自らの命のことまで出した。
「これを手に入れる為にどれだけ苦労したか・・・・・・。僕はまずこれを手に入れたんだ。自分のものになぞ目もくれず」
「ルーシェ・・・・・・」
シェニエはここでようやく友の気持ちを理解した。彼は自分が助かることよりまず友を救うことを優先させたのだ。
「受け取ってくれるね」
「うん」
シェニエはようやくその通行証を受け取った。その時だった。
「ん！？」
そこでペロネ橋の方から騒ぎ声が聞こえてきた。１２
「何だいあれは」
「有り難いな」
ルーシェはそれを見て微笑んだ。
「シェニエ、天の配剤だ。どうやらジャコバンの奴等が来るらしい」
「奴等が」
シェニエはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「彼等は何故あんなに熱狂的に処刑台を迎え入れることができるのだろう」
彼は群集を見た後首を悲しそうに横に振って言った。
「かっての貴族達に仕え今は処刑台に仕えている。これでは何も変わらない。いや、さらに悪いじゃないか」
「シェニエ」
ルーシェは言葉を出す彼を心配そうに見ている。
「そんなことを言っている時じゃない。すぐにここから立ち去るんだ。皆の気があちらに向いている間に。さあ」
「いや」
だがシェニエはまた首を横に振った。
「私はあの者達を見ておきたい」
「何故だい！？」

「私の敵がどの様な連中かをね。いいかい」
「馬鹿なことを言う」
今度はルーシェが首を横に振った。
「彼等に見つかったら大変だぞ」
「その時はその場で立ち向かうさ。そして堂々と言ってやる。私の主張が間違ってはいないと。そう」
彼はここで顔を上げた。
「彼等が正しければ私を殺す理由はない。私を疎ましく思い排除しようとするのは彼等の心にやましいことがあるからだ」
「そうか、そこまで覚悟があるのなら」
ルーシェも腹をくくった。
「僕も付き合おう。こうなったら乗りかかった船だ」
「有り難う」
シェニエは友に対し礼を述べた。
「いいさ。僕も奴等にとっては邪魔な存在だしね。どうせなら最後まで見てやるさ」
そして二人は橋の近くの森の陰に入った。それを遠くから見る影もいた。
「万歳！フランス万歳！」
群集達の熱狂的な声がする。向こうから質素な身なりの一団がやって来る。
質素といっても群集達と比べればかなりの差がある。それはかっての貴族達と比べてかなり質素だという意味だ。見れば青い上着に白いシャツに赤いタイ。黒いズボンと同じ色のブーツを履いている。所謂サン＝キュロットだ。
そして多くの者は顎鬚を生やしている。髪は前後で短く切っている。化粧もせず当然カツラも付け毛もしていない。
これが彼等の服装であった。ジャコバン派はそれまでの貴族的な風俗を徹底的に排除していたのだ。
彼等は歩いている。何故なら彼等も民衆と同じだからだ。

「歩いているな」
「ああ」
ルーシェとシェニエはそれを見ながら囁き合っていた。
「ジャコバンの連中が質素で贅沢を嫌っているというのは本当らしいな」
「そうらしいな。彼等に腐敗はない。だが」
「だが！？」
ルーシェはシェニエの言葉に問うた。
「だからといって彼等が正しいかというとそうではない。貴族達の贅沢とはまた違った意味での悪だ」
「悪か、彼等が」
「そうだ。それはすぐにわかる。いや」
シェニエはここで言葉を変えた。
「私も君も既にわかっている筈だ」
「確かに」
ルーシェも愚かな男ではない。学生時代より啓蒙思想に親しんできた。そして革命の一部始終をその目で見てきているのだ。
だからこそ今橋の上にやって来た彼等の正体がわかっていた。彼等は自分達が言う様な存在では決してないのである。
「神と司祭達だ。姿形を変えた」
シェニエが言った。
「確かに」
ルーシェもそれに頷いた。見れば一団は中央にいる男を取り囲んでいた。
「万歳！ロベスピエール万歳！」
群集は彼の姿を認めるとさらに声を大きくさせた。そこには白い髪に青い目をした男がいた。髭はない。背はやや小柄だ。見たところ政治家というより学者の様な顔をしている。鼻は高く顔は小さい。
「何かあまり悪辣な顔立ちではないな」
「確かにな。その生活は生真面目なものだと聞いている」

シェニエの言葉は真実であった。ロベスピエールは自分にも他人にも厳しく清廉潔白な人物であった。しかしだからといって彼の思想が正しいとは限らないのだ。

「だが彼の命令一つで多くの者が死ぬ」

ルーシェはそれを聞くとゴクリ、と喉を鳴らした。

「そしてフランスはギロチンにより支配される」

革命委員会、公安委員会、革命裁判所。軍の目付け役。ジャコバン派が設けたものだ。これ等に逆らうことはそれだけで『革命の敵』とされた。ジャコバン派に異を唱えるのも『革命の敵』である。敵はギロチンに送られる。そして多くの貴族やジロンド派の後を追うことになるのだ。

第二幕その五

後を追うのは別に貴族やジロンド派、『革命の敵』だけではない。彼等にとって邪魔な存在は無辜の民衆ですら殺す。革命は貴族の血だけを欲していたのではないのだ。

「ロベスピエール、御前も俺の後を追うのだ！」

かってのロベスピエールの同志であり、盟友であったジャコバン派の重鎮ダントンの言葉だ。彼等は盟友ですらギロチンに送ったのだ。

マラーも死んだ。カミュも死んだ。革命はそれの為に身を捧げた者達の血をも飲み干そうとしていたのだ。

「あの男がいる限りフランスの血は止まらない」

シェニエは言った。

「ジャコバン派がこの世にいる限りこの世から血は止まらない」

この言葉は彼の後も残った。ジャコバン派が消えても残った。長い間人々に忘れ去られていたが細々と生き残っていた。そして甦るのだった。二十世紀の欧州に。

ナチスとソ連。彼等の正体はこのジャコバン派に他ならなかった。彼等は新たなロベスピエールに率いられ世界を血で覆ったのだ。

「我々こそが絶対の正義なのだ！」

「逆らう者には死を！」

そしてこの世は地獄と化した。二十世紀人類は最後まで彼等の影を払うことは出来なかった。

シェニエは神ではない。だからそれは知らない。だが彼の言葉は真実であった。

「おや」

シェニエはここで一人の男の存在に気付いた。

「ジャコバン派にいるとは聞いていたが」

彼等の中にジェラールの姿を認めたのだ。彼は屋敷を飛び出した

後すぐに起こった革命に身を投じた。
最初はバスチーユに突撃する一人の兵士に過ぎなかった。だがやがてロベスピエールと出会い彼に認められる。そして頭角を現わし今では彼の同志の一人だと言われている。
ジェラールは一団の一番後ろにいた。そこにあの影が来た。
「ジェラール様」
影は既に服装をサン＝キュロットに着替えている。そして目立たぬようジェラールに近付いた。
「見つかったか」
「詩人とその連れが見つかりました」
「そうか」
シェニエとルーシェのことだ。
「彼等は今はいい。放っておいても構わない」
「よろしいのですか？」
「うん。ところで女は見つかったか」
「はい。確かにこの目で」
「そうか、ならいい」
彼はそれを聞き目を細めた。
「遂に見つけたな。それも君のおかげだ。ロベスピエール同志には私から言っておこう」
「有り難き幸せ」
彼はそれを聞くと恭しく頭を垂れた。
「待て」
だがジェラールはそれを制した。
「我々は同志だ。その様な貴族の様な挨拶はいい」
「左様ですか」
「そうだ。我々は対等なのだからな。そうしたへりくだりは無用のものだ」
これもまたジャコバンの考えである。だが彼等はその中心に絶対なる神を戴いている。偽りの平等なのだ。

「今夜にでもお会いできるでしょう。居場所はもう掴んでおります」
「そこまでやってくれたか」
「はい、これも仕事ですから」
「有り難う」
彼は以前とは変わってはいない。少なくともその心はあの頃と同じである。そう、あの頃と。
「ご苦労、君の任務は終わりだ。ではこれからゆっくりと休むがいい」
「わかりました」
密偵は頭を垂れた。そしてその場を後にした。
「金は大丈夫か」
「おかげさまで」
後ろから声をかけてきたジェラールに答える。そして彼はそこから姿を消した。
「誰かを探し当てた様だな」
シェニエはそれを見て呟いた。
「どうせ碌なことじゃないさ。ひょっとしたら我々かも」
「有り得るな」
二人はそんな話をしていた。やがてジャコバンの議員達はテュイルリー公園に入った。そこで華美な色とりどりの淫らな服に身を包んだ女の一団が姿を現わした。
「娼婦達だ」
ルーシェはそれを見てシェニエに囁いた。
「かっては貴族だった者達だ」
「そうか」
シェニエはそれを見て頷いた。
「確かに彼女達は贅沢を欲しいままにしていた」
彼の顔がみるみるうちに曇っていく。
「だが全てを奪い外に放り出せとは私は言わなかった」
彼はそうしたあまりにも急進的な考えは否定していた。

「ましてやそのうえ命まで奪うなどとは」
あくまでジャコバン派とは相容れなかった。彼は何処までも彼なのだから。
「暗くなってきたな」
ルーシェは辺りを見回した。

第二幕その六

「そうだな」
「こうした御時世だ。街には確かに無法者は少ない。しかし」
「無法者が権力を握り警官になっている。早いうちにここから姿を消すことにしよう。私はいいが君に迷惑がかかる」
「済まない」
ルーシェはシェニエの気遣いに感謝した。ここでシェニエが言った無法者とはジャコバン派の手の者達のことである。彼等は将に無法者そのものであった。これもまた後世に受け継がれた。ナチスやソ連は将に凶悪犯が権力の座にあったのだ。犯罪が少ないのも当然であった。刑務所にいるべき人物が権力の座にあったのであるから。
「もし」
ここで誰かが声をかけてきた。女の声だ。
「ん！？」
二人はそちらに振り向いた。
「私では駄目でしょうか」
先の娼婦の一人であった。
「ベルシ」
シェニエは彼女を見て思わずその名を呼んだ。身なりは変わり果てていたがそれは確かにベルシであった。
「シェニエ」
彼女もシェニエに気付いた。思わず声をあげた。だがその時であった。
「おお」
ここで先程ジェラールに何か話していた密偵がやって来た。
「ベルシじゃないか。丁度いい」
「貴方は」
シェニエが彼に声をかけた。密偵は彼に目を向けた。

（今はこの男は放っておいていい）
彼はシェニエを知っている。だが今はあえて見逃すことにした。今目の前にいる女の方が重要であるからだ。
（どうせすぐにかかるしな）
シェニエから目を離した。
「あんたに会いたいと思っていたんだ」
そしてシェニエを無視してベルシに語り掛けた。
「私に？」
「そうだ、あんたにだ」
彼は言った。
「あっちで話をしたいんだがいいか」
そう言って橋の下を指し示す。
「安心してくれ。今日はあんたを買いに来たわけじゃない。だが金はたんまりと払う」
「本当！？」
娼婦といっても好きでしているわけではない。見ず知らずの男に抱かれるのはやはり嫌だった。しかしそれもしなければならなかった。生きる為に。それをせずに金が手に入るのならそれにこしたことはなかった。
「ああ。私が嘘を言ったことがあるか」
「いいえ」
密偵といっても彼はそれなりの知性と教養があった。だからこそジェラールも使っているのだ。
「では行こうか」
「ええ」
そして二人は橋の下に消えて行った。
「客を取ったか。よくある光景だ」
ルーシェはそれをあまり快い目で見てはいなかった。
「ああ」
シェニエもそれは同じであった。二人は一刻も早くこの場から立

ち去りたかった。
「行くか」
「うん」
二人は去ろうとした。橋の上を通り掛かる。その時だった。
「もし」
ベルシが二人に声をかけてきた。
客を取っていたのではなかったのか、二人はそう思ったがそれは隠してベルシに顔を向けた。
「何か」
二人は彼女に応えた。
「アンドレア＝シェニエさんですね。覚えておられますか」
「はい」
シェニエは応えた。
「お久し振りです。まさかこの様なところでお会いできるとは思いませんでした」
「確かに」
シェニエはここで人生とは皮肉なものだと思った。しかしそれも顔には出さない。
「あの時の宴以来ですね」
「はい」
思えばあの時からもう五年の月日が流れている。時の経つのは早く、そして残酷なものであった。
「今では本当に懐かしい日々です」
「・・・・・・・・・」
シェニエはそれについては何も言わなかった。言っても彼女を傷つけるだけだとわかっていたからだ。
「ところで貴方にお会いしたいという方がおられるのですが」
「誰ですか」
用心はしていた。ジャコバン派の者ならば彼にも考えがあった。
「ご存知だと思いますが」

「む・・・・・・」
手紙のことだと咄嗟に理解した。
「よろしいでしょうか」
「はい」
密偵はその様子を橋の下で聞いていた。
「かかるか」
彼は耳を澄ませ話を聞いている。
「シェニエ」
ここでルーシェが出て来た。
「気持ちはわかるが」
彼はすぐにそこに危険を嗅ぎ取っていた。
「いや」
だがシェニエはそれに対し首を横に振った。彼には自分の考えがあった。
「私は会いたい、その人に」
「馬鹿な、正気か」
「正気でなかったらこんなことを言うと思うか」
「それは」
ルーシェもそれはわかっていた。シェニエは決して冗談や一時の狂気でその様なことを言う男ではない。
「会いたい、そしてその女の人と話がしてみたい」
「そうか」
ルーシェもそれを聞いて納得した。

第二幕その七

「じゃあ行くがいい。僕はそれを温かく見守ろう」
「有り難う」
彼は友に感謝の言葉を述べた。
「彼女は何処にいるんだい？」
「今夜この場所で」
「わかった、今夜だね」
「はい」
ベルシは頷いた。
「では行こう、僕は一人で行く」
「シェニエ」
ルーシェは友を気遣った。
「大丈夫さ」
だが彼は笑顔でその心配に応えた。
「自分の身位守れるさ。かっては軍人だったしね」
「そうか、ならいい」
言っても引く男ではない。ここは折れることにした。
「ただし、捕まらないようにな。君は狙われている」
「わかっている」
わかっていようとも愛の為に死地に飛び込むのも詩人であった。
シェニエは詩人である。
彼等は別れた。シェニエとルーシェは隠れ家に、ベルシはマッダレーナのところに。そして密偵はジェラールのもとに。
夜になった。橋に火が点いている。見ればパリの所々に火が灯されている。
これが鯨油であった。それまで貴族達のものであった夜の灯りを民衆が手に入れたのだ。
「これで首を刎ねられた貴族の屍も焼いてやれ」

灯りを点ける男が言う。パトロールの警官達はそれを目を細めて見ている。
「いい心掛けだ。貴族達をギロチンに送るのが俺達の仕事だからな」
彼等は街の警備が主な仕事ではない。夜の闇に紛れてパリから逃れようとするジロンド派や貴族の残党達を捕らえるのが主な仕事だ。
「ほら、来い」
見れば既に一人捕らえている。法衣を着ているところを見ると僧侶か。かって僧侶達も貴族達と共に特権階級にあった。むしろ貴族達よりも力があった。
「断頭台が待っているぞ。その前に全て吐かせてやる」
警官の一人が僧侶の尻を蹴飛ばす。最早人間として扱ってはいない。
「来い、豚が」
そして乱暴に引き立てて行く。僧侶の顔はまるで肉屋に連れて行かれる牛の様であった。
「おい」
その僧侶の背を見ながら別の警官が同僚に言った。
「俺はあの坊さんを知っているのだが」
「そうなのか」
言葉をかけられたその警官は意外そうな顔で応えた。
「あの坊さんは別に悪い人じゃないぜ。むしろいい人だ」
「そうなのか」
「ああ。困っている人も助けていたし真面目に教えていた。私腹を肥やしたりもしていなかった」
「そうか。しかしそれは絶対に言うなよ、俺以外には」
「わかってるさ」
その警官は顔を顰めて答えた。彼等は親友同士なのだ。
今は貴族であるだけで、僧侶であるだけで罪であったのだ。革命に異を唱えるだけで罪であったのだ。
しかし誰もそれには言わない。革命こそが絶対の正義であるから

だ。そしてそれに逆らうことは絶対に許されないことであるからだ。もし逆らえば待っているのは死だけであった。
「行こう。まだ回るところはある」
「ああ」
彼等は僧侶を引き立てていく同僚と別れ次の巡検場所に向かった。そしてそこには誰もいなくなった。だがすぐに影が姿を現わした。
「ここか」
あの密偵であった。キョロキョロと辺りを探っている。
「もうそろそろ来る頃かな」
彼はそう呟くと物陰に消えた。やがてそこに一人の女が姿を現わした。
「ここね、ベルシが言ったのは」
マッダレーナであった。みすぼらしい赤い服に黒い靴、そして上からヴェールを被っている。何かから身を守ろうとしているようであった。
先程の警官達は貴族や僧侶と見れば容赦なく捕らえる。そう、彼女も例外ではないのだ。
「記念の像。夜見るとこんなに無気味なものだったの」
マラーの像を見て呟く。それはまるで夜の闇の中に立つ魔神の様であった。
「マッダレーナか」
密偵は物陰から彼女を見て呟いた。
「さて、肝心の獲物は来るかな。彼女は言うならば獲物を捕らえる鷹か。いい鷹であってくれればよいが」
そう言ってニヤリと笑う。そして物陰に姿を隠した。
やがて誰かがこちらにやって来た。灯りの中にぼんやりと姿が見えている。
「あれは」
マッダレーナも密偵もそちらに目をやった。その灯りの中に見える男はゆっくりと近付いてきていた。

「あの人だわ」
マッダレーナはその姿を片時も忘れたことはなかった。あの時から。そう、彼が今姿を現わしたのだ。
「アンドレア＝シェニエさんですね」
「はい」
シェニエはマッダレーナの問いに答えた。彼は彼女の手紙のことは知っている。しかし誰なのかは知らない。
「貴女が手紙を送って下さったのですね」
「はい」
マッダレーナは答えた。
「私です」
「そうなのですか。では私にお会いしたいというのは」
「はい、それも私です」
彼女はそれを認めた。
「そうなのですか。ではよろしければお名前を教えて頂きたいのですか」
「おわかりになりませんか」
マッダレーナは問うた。
「申し訳ないですが」
シェニエはそれに対してうなだれて答えた。
「仕方ありませんね」
それもそうだった。あれからもう何年も経っているのだ。
密偵はそれを用心深く窺っている。物陰から見る。
「いいぞ、その調子だ」
彼は場所を変えた。そして二人に近寄る。

第二幕その八

「シェニエ様」
「はい」
「貴方はご存知の筈です」
「私がですか」
「ええ」
マッダレーナはそう言って彼に微笑んだ。
「かって貴方に目覚めさせて頂いたのですから」
「貴方をですか」
「ええ。あの時は腹立たしくも思いましたが今では感謝しています」
彼女の顔からは笑みが絶えることはない。どうやら彼に感謝しているというのは本当のようだ」
「ふむ」
彼は口に手を当てて考え込んだ。
「昔のことですよね」
「はい」
「少し待って下さい」
彼は手で彼女を制しながら言った。
「暫く思い出すことに努力します」
「どうぞ」
そして彼は自分の記憶をたどりはじめた。
「この声は何処かで」
「貴女は愛を知ってはおりません」
マッダレーナはここで言った。
「愛を」
「ええ」
彼女はシェニエにあえてこう言ったのだ。
「そういえば私の詩で使ったことのある言葉だ」

彼女はここでまた言った。
「愛とは神が与えられるもので軽蔑してはいけません」
「これは」
ようやく思い出した。それは五年前の宴の時の詩だ。
「まさか」
シェニエはようやく悟った。咄嗟にマッダレーナの方を向く。
「貴女は」
「思い出していただけましたか」
「宜しければそのお顔を拝見したいのですが」
「喜んだ」
マッダレーナはヴェールを脱いだ。そしてその顔を見せた。
「おお」
シェニエはその顔を見て思わず声をあげた。そしてすぐに記憶が甦ってきた。
「あの顔だ」
密偵は彼女の顔を認めて言った。
「間違いないぞ」
彼もまた確信したそしてすぐにその場を去った。
「すぐに同志ジェラールにお伝えしよう」
そして足早にその場を後にした。
「まさか貴女だったとは」
あの宴の日々が甦って来る。そして目の前にいる彼女はあの時から成長してさらに美しくなっていた。
「マッダレーナさん、よくぞご無事で」
「全ては神のご加護です」
彼女は微笑んでそう言った。
「それにしてもよくぞここまで来られました」
「全ては貴方にお会いする為に」
「しかしそれでも」
「その時は私は侍女を装いますわ」

そしてまたヴェールを被った。
「このようにして」
「そうですか」
シェニエは心の中で彼女の変わり様に驚いていた。
かって彼女は何も知らない貴族の箱入り娘であった。苦労も他の者のことも何一つ知らなかった。だが今は違う。
五年もの年月が彼女を変えた。今の彼女は世を知る聡明な女性であったのだ。
(革命、いやそれにより時代の変化が彼女を変えたのか)
シェニエはそれを見て思った。
(それにしても何と美しい)
そして歳月は彼女自身をも変えていた。
少女が今では魅力的な女性になっていた。若い薔薇が今では大輪になっていた。
「シェニエ様」
「はい」
マッダレーナが言葉をかけてきた。
「あれから色々とありました。その中で私は貴方のことを思うようになったのです」
「私のことを」
「そうです。夢に見たことも幾度もありました。私は最初何故だかわかりませんでした」
「夢にまで」
「はい。そして革命の最中私は考えました。この激動の中で」
「大変だったでしょう」
「いえ」
口では否定してもその記憶までは否定できない。多くの苦難が彼女を襲った。
「ベルシがいましたから。私の親友が」
「彼女が」

「はい。身を売ってまでして私を守ってくれました」
「何と」
シェニエもそれには口を固く閉ざした。
「そこまでして貴女を」
「私も身を売る以外のことは全てしました。家のものも何もかも売って服さえも売って」
彼女の家には資産があった。革命派に奪われる前にそれを売ったのだ。
「賄賂にもなりました。生きる為の」
「ジャコバンの者達にですね」
「ええ。そうして何度も危ないところを切り抜けました」
「大変だったでしょう」
「いえ、ベルシに比べれば」
彼女の家はマッダレーナの家程多くの資産はなかった。そして屋敷を襲われそこで両親も家族も殺された。かろうじて逃げ延びた彼女だが残ったのはその身一つだったのだ。女性が生きていくには娼婦になるしかなかったのだ。
「そして私達はこのパリで隠れる様にして生きてきました。その中で貴方のお話をお聞きしたのです」
「私のですか」
「そうです。そして次第に貴方へのお気持ちを抑えられなくなりました。そして遂に抑えきれなくなり手紙をお送りしたのです」
「それがあの一連の手紙だったのですね」
「はい」
マッダレーナは頷いた。シェニエはジャコバン派を批判する者として度々話題になっていたのだ。ロベスピエールも彼を危険視するようになっていた。
「そして今貴方にお会いする為にここへ来ました」
「危険も顧みずに」
「危険なぞ今まで幾度も切り抜けてきました。今更何程のことがあ

りましょう」
シェニエはその言葉にまた感じ入った。
（彼女はもう貴族の深窓の令嬢などではない）
そう、かっての彼女は死んでいたのだ。
今ここにいるマッダレーナはかっての幼虫から美しい蝶へと変わっていた。外見だけでなく心もだ。
シェニエは彼女に魅せられてきているのを感じていた。彼はそれを拒まなかった。
「お聞き下さい」
マッダレーナは言った。
「この一月の間私は誰かにつけ回されています」
「ジャコバン派の密偵ですか！？」
「わかりません。おそらくはそうだと思いますが」
「厄介ですね。私もマークされていますが奴等は極めて執念深い」
「わかっています。しかしそれでベルシに迷惑をかけるつもりはありません」
「どうされるおつもりですか？」
「私は自分の身は自分で守ります。それが私の生き方です」
彼女は毅然とした声でそう言った。
「ご自身で」
「はい、何があろうともベルシを巻き込みたくはありません」
「わかりました」
シェニエはそれを聞いて言った。
「では私が貴女を御守りします」
「え・・・・・・」
マッダレーナは思わず言葉を失った。

第二幕その九

「何かご不満でも」
「いえ」
不満なぞなかったただその申し出が信じられなかったのだ。
「本当でしょうか」
「私は嘘は言いません」
彼はそう言い切った。
「この命にかえて貴女を御守りしましょう」
「シェニエ様・・・・・・」
「その命預けて下さいますか」
「喜んで」
マッダレーナはコクリ、と頷いた。
「よかった、ではこれから私は貴女の為に全てを捧げます」
「全てをですか」
「ええ。では行きましょう、ここは危ない」
「はい」
二人はその場を去ろうとする。シェニエは辺りを慎重に探る。
「大丈夫です、行きましょう」
シェニエが先に行く。そして進んで行く。やがて二人の行く先に誰かが姿を現わした。
「ルーシェか！？違うな」
シルエットを見てすぐに悟った。杖を持つ手に力を入れる。
「やっとお会いすることができた」
「誰だ、君は」
シェニエは彼の名を尋ねた。
「そういう君こそ誰だ」
その者は逆にシェニエに問うてきた。
「私はジェラールだ」

「ロベスピエールの側近のか」
「如何にも」
ジェラールはそう言ってこちらに歩み寄ってきた。
「君が誰だか知らないが」
どうやらシェニエだとは気付いていないようだ。
「私はそこにいる女性を保護する為にここに来た」
「保護！？」
「そうだ。その人は今危機にある。私はそれを救いに来たのだ」
「面白いことを言う」
シェニエはややシニカルに言った。
「彼女に危機を与えているのは君達ではないか」
「私は違う」
ジェラールは怯むことなく言った。
「マッダレーナ」
そして彼女の名を呼んだ。
「私のことを覚えておられるでしょうか」
「貴方のことを」
「そう、かって私は貴女の家にいた。そう、あの頃は卑しく使われるだけだった」
「まさか」
マッダレーナはその声にハッとした。
「貴方はまさか」
「心当たりが」
「はい」
シェニエの問いに答えた。
「覚えておられますか、あの時の宴の最後を」
「ええ。確か使用人の一人が民衆を連れてその場を立ち去った」
「そう」
ジェラールはそれを聞き満足したような声を出した。
「それを知っている君も貴族だな。だがその品性は決して卑しくは

ない」
　ジェラールにとって貴族とは全て卑しく、排他されるべき存在であった。だからこそ彼は革命に参加したのだ。
「ジェラール、一つ忠告しておこう」
「何だね、騎士殿」
「君はロベスピエールのことをよくわかっている筈だ。おそらく私よりも」
「それが何か」
　ジェラールはピクリ、と眉を顰めた。
「彼は危険だ。あれでは王政より遥かに悪い」
「言っている意味がよくわからないが」
　彼はあえてとぼけてそう答えた。
「誤魔化す必要はない。君ならば既に気付いていると思う。すぐに手を引くんだ」
「それはできない」
　だがジェラールはそれを断った。
「私は革命に命を捧げたのだ。今更退くことはできない」
「そうか。なら仕方ないな」
「そしてもう一つ言っておこう」
「何だ！？」
「彼女は私のものだ。さあ、渡してもらおう」
「クッ」
　シェニエは杖を構えた。ジェラールはそれに構わず少しずつ近付いてくる。その手には拳銃があった。
「まずいな、このままでは」
「一つ聞きたい」
　ここでジェラールはシェニエに尋ねてきた。
「何だ」
「良かったら君の名を教えて欲しいのだが」
「私の名か」

「そうだ。どうやら名のある方とお見受けするが」
「そうか」
ジェラールには別に悪意はない。彼は紳士的な立場から尋ねてきているのだ。
「わかった」
シェニエは頷いた。そして静かに名乗った。
「私の名はシェニエ。アンドレア＝シェニエという」
「アンドレア＝シェニエ！？まさか」
ジェラールはそれを聞いて大いに驚いた。
「まさかこんなところで」
「どうやら私のことを知っているようだな」
「知らない筈がない、君はお尋ね者だからな」
「そうか。では今ここで私を射殺するかね。革命に対する罪で」
「うう」
ジェラールは戸惑った。彼はこうした時、弱い女性を守る男を撃てる男ではなかった。

第二幕その十

（だが逃がすわけにはいかない）
しかしジャコバンとしての理念が彼にそう囁いていた。だがそれもまた。
彼は逡巡していた。動きが止まっていた。その時だった。
「シェニエ、そこにいたか！」
誰かがこちらに駆けてきていた。ルーシェの声だ。
「ルーシェ！」
シェニエはその声がした方に顔を向けた。
「心配になって来てみたら危ないようだな、加勢するぞ！」
「いや」
だがシェニエはそれを断った。
「私よりもこの女性を、彼女を安全な場所まで！」
「わかった、そうしよう！」
ルーシェはこちらに辿り着くとマッダレーナの前に来た。そして彼女の手を取った。
「さあ、こちらへ」
「え、ええ」
マッダレーナはルーシェに連れられ安全な場所まで逃れていく。
あとにはシェニエとジェラールが残った。
「さあ、ジェラールよ」
シェニエは暗闇の中彼を見据えた。その目が慣れてきていた。
「どうするつもりだ」
「どうするつもりか、か」
ジェラールは言った。
「そうだ。君は銃、私は杖だ。勝負は見えている。おそらく一撃で全ては終わる」
「そうだろうな」

「だが私とてただでは死なない」
彼は強い口調で言った。
「最後に力で君を倒すこと位はできる。例え心臓を撃ち抜かれてもな」
「心臓をか」
「そうだ。彼女を逃がす為ならな」
「彼女をか」
ジェラールはそれを聞いて何かを思ったようである。
「わかった」
そう言うと銃を構えていた腕を下ろした。
「行くがいい。今君をどうこうするつもりはない」
「何故だ」
シェニエは警戒を解かないまま尋ねた。彼の行動を意外に思った。
「彼女を守ってくれ。今の男一人ではパリの街は心許ない」
「ジェラール」
「勘違いしないで欲しい。君が革命の敵であることには変わりない」
「革命の敵、か」
「そうだ。だが今の彼女には君が必要だ。悔しいがそれは認める」
「そうか」
「すぐに行くがいい。そして彼女を守るんだ」
「よし」
シェニエは踵を返した。そして二人の後を追う。
「一つ言っておく」
「何だ」
シェニエはその言葉に顔を振り向かさせた。
「今度会った時一人ならば容赦しない。捕らえたならばな」
「わかっている。それでは」
「ああ」
シェニエはその場を走り去った。そして二人の後を追って消えていく。

「頼んだぞ」
ジェラールはその後ろ姿を見送って声をかけた。そして彼も闇の中へ消えていった。

第三幕その一

第三幕　革命裁判

広い土間が二つに仕切られている。半分には裁判所が置かれ、もう一方には聴聞席が置かれている。そこに市民達が集まってきている。

その後ろにはトリコロールが掲げられている。フランスの革命の旗である。それはそれぞれ大きな槍にくくり付けられている。

『市民達よ、祖国は今危機にある』

旗にはそう書かれていた。そのことからこの裁判が尋常ではないことがわかる。

「諸君！」

そして聴聞席では一人の男が市民達に演説を振るっていた。

「今我がフランスは絶体絶命の危機にある」

彼は真剣な顔と声で訴えている。

「内部にはジロンドや多くの革命の敵がいる。彼等はどれだけ断頭台に送ろうとも諦めることはない。このフランスを滅亡させようという企みを」

「それは本当ですか！」

市民達の中にはその告発に驚く者もいる。

「私は嘘は言わない」

その男は言った。見れば茶色の髪に顎鬚を生やしている。そして礼の青い上着に赤いタイ、白いシャツのサン＝キュロットである。

「同志マテュー」

誰かが彼に尋ねた。

「何だ、愛する同志よ」

マテューは彼に応えた。

「彼等は国内だけで留まっているのでしょうか」

「というと」

彼はあえて言葉を誘導させた。
「もしかすると国外の敵と共謀しているのではないでしょうか」
「国外の敵」
彼はわかっていたがあえて考える顔をしてみせた。
「それはオーストリアやプロイセンのことかね」
「はい」
その市民は頷いた。
「つまり君は国内の反革命勢力が他の国々と共謀してこのフランスを潰そうとしているのではないか、と考えているのだね」
「そうです」
彼は答えた。
「本当のところはどうなのでしょうか」
「その通りだ」
マテューは答えた。
「彼等はオーストリアやプロイセンと繋がっている。かっての市民ルイ＝カペーの様に」
ブルボン朝の国王ルイ十六世のことである。彼は王権が停止されるとそう呼ばれたのである。彼は実際にオーストリアやプロイセンにフランス軍の情報を流していたと言われている。オーストリアは彼の妃マリー＝アントワネットの実家である。欧州随一の名門だ。
「何と！」
他の市民達はそれを聞いて驚きの声をあげた。マテューはさらに言った。
「聞いて欲しい諸君」
「何でしょうか」
市民達は危機感に震えながらも彼の言葉に耳を傾けた。
「彼等に勝つには諸君達の力が必要だ」
彼はここで顔に悲壮感を漂わせた。
「今我々には金と兵隊が必要だ。この愛すべき祖国フランスを守る金と兵士が」

「それでフランスが守れるのでしょうか」
「守れる。いや、それなくては我々は皆殺しに遭う。革命の敵によって」
「革命の敵に」
「諸君、それでいいのか！」
彼はここで声をあらわげさせた。
「あの者達にむざむざと殺されていいのか！我々が血により手に入れた権利をもう一度あの腐り果てた貴族達に渡してよいのか！」
「嫌だ！」
市民達はそれに対して言った。
「ではどうするべきか！」
マテューは彼等に問うた。
「戦うべきではないのか！」
「そうだ！」
市民達はそれに応えた。
「戦いだ！戦いだ！」
彼等は口々に叫ぶ。
「ジロンド派を殺せ！王党派を殺せ！」
声は何時しか血生臭いものになっていた。
「オーストリアの奴等を殺せ！プロイセンの奴等を殺せ！」
次第にそれは外にも向いていく。マテューはそれを見て内心ほくそ笑んだ。
（これでよし）
これこそが彼の狙いであったのだ。
革命は敵を欲する。そしてそれは内外に向けられる。
内の敵はジロンド派と王党派だ。彼等は見つけ次第次々にギロチンに送っていく。罪状はどうでもよかった。そこに属していること自体が罪なのだから。
そして外の敵はオーストリアやプロイセン。特に王妃の生家であったオーストリアは格好の敵であった。

「革命は血を欲する」
それは貴族の血だけではないのだ。他国の者、そして革命を担う民衆の血をも欲しているのだ。
マテューはそれがわかっていた。ロベスピエールも。だから彼等は民衆を扇動する。そして彼等を血に誘うのだ。
ここで民衆を血に誘う者達の中で最も弁の立つ者が姿を現わした。
「おお！」
民衆は彼の姿を見て声をあげた。
「ジェラール！」
そこにジェラールが姿を現わしたのだ。
「友よ、よく来てくれた！」
マテューが彼に声をかける。ジェラールはそれに対し大きく手を振った。
彼は市民達から絶大な人気があった。生真面目であり誰に対しても紳士であった。そして誠実かつ情熱的であったからだ。彼に私も野心もなかった。だからこそロベスピエールも彼を側に置いているのだ。
「ジェラール！」
民衆は彼に熱狂的な声をかけた。
「同志達よ」
ジェラールはそれに応え彼等に言った。大きな声だった。
場は一気に静まり返った。ジェラールはそれを確認して言葉を続けた。
「今の我が国の置かれた状況は理解してくれていると思う。知っての通り大変な状況だ」
それは既にマテューが言っていた。だがジェラールの言葉はそれ以上に心を打った。
「ローダンは陥落しヴァンデーでは死闘が続いている。そしてブルゴーニュからも敵が迫っている。我々を滅ぼそうと敵が迫っている」
彼はここで民衆を見回した。

第三幕その二

「オーストリア、プロイセン。そしてその背後にはあのイギリスがいる」
「イギリス！」
民衆はそれを聞いて思わず絶句した。言わずと知れたフランスの宿敵である。これは王室が倒れようと変わることはない。
「彼等に対し勝利を収めるには何が必要か。それはわかってくれていると思う」
ここでまた民衆を見回した。
「勝利を収めるには貴方達の力が必要だ。資金を、そして兵士を頼む！フランスを救ってくれ！」
「わかった！」
民衆はそれに応え熱狂的な半ば叫び声のようなものをあげた。
「これを渡そう！愛する祖国の為に使ってくれ！」
そう叫んでジェラールやマテューに対してその手に持つそれぞれのものを差し出した。
首飾りに指輪、銀の留め金、金のボタン。中には銀のロザリオもあった。
「愛する祖国の為に！」
「フランスを救う為に！」
側にあった馬車の中に次々と投げ込まれる。そしてその中は忽ちその宝で満杯になった。
ジェラールもマテューも純粋にそれを喜んだ。彼等はそれを自分達の懐に入れるつもりはなかった。ただ祖国の為に使うつもりであった。
こうした意味で彼等は高潔であった。ロベスピエールがそうであるように。だがこの宝で新たなギロチンが作られ、新たな敵を葬るのだ。

それが彼等の正義であった。正義の為に使われるのならばよいのである。
ジェラールはそれを見て顔を一瞬曇らせた。だが一瞬だったので誰も気付かなかった。
ここで一人の老婆が姿を現わした。
「もし」
彼女はまだ幼さの残る少年に導かれこちらにやって来る。服は粗末で腰は曲がっている。
その動きは少年に導かれるままだ。どうやら目が見えないらしい。
「ご老人、どうかされましたか」
ジェラールは彼女に声をかけた。
「はい」
彼女は問われゆっくりと口を開いた。
「私の夫と息子はバスティーユとヴァルミーで死にました。そして今は墓の下にいます」
「名誉の戦死ですね」
「はい。私ももうすぐこの世を去りましょう」
ジェラールに応えた。
「嫁も死に私の身寄りはこの孫一人となりました」
そう言って手を引く少年に手を当てる。
「私の孫。たった一人の私の肉親」
彼女にとってはかけがえのない存在であることがわかる。その証拠に彼を見る光のない目が温かいものであった。光がなくとも彼女は孫を見ていたのだ。
「けれどこの子を革命に捧げます。フランスを救う為に」
「そうですか」
ジェラールはそれを聞きいたたまれない気持ちになった。だがそれを顔に出すことは許されなかった。
「では私は喜んで貴女の捧げものを受け取りましょう。彼の名は」
「ロジェーです。ロジェー＝アルベルト」

「ロジェー＝アルベルト」
マテューが名簿にその名を記入する。見れば志願兵達もそこに集まっている。
「今夜出発です。そしてお孫さんはフランスの為に活躍することでしょう」
「願ってもない幸せです」
彼女はそれを聞くと微笑んだ。
「あとは貴女の目と杖ですが」
「それは我々が」
周りの者が出て来た。そして老婆の手を取った。
「お婆さん、行きましょう」
「あ、有り難うございます」
彼女は謹んで礼を言った。
「貴女は革命に全てを捧げられた。今度は我々が貴女に捧げる番です」
「有り難い、私の様な何の力も無い老婆に」
「お婆さん、それは違います」
そこでジェラールが言った。
「貴女は今まで貴族達の圧政に耐え、そして今は革命に全てを捧げられました。貴女もまた一人の闘士なのです」
「私が」
「はい。ですから誇りを持って下さい。革命の戦士、自由の戦士としての誇りを」
「誇りを」
「そうです、今まで我々が持つことすら許されていなかった誇りです。それを持ち胸を張って下さい」
「わかりました」
彼女はそう言うと歩き出した。それまでの弱々しい足取りではなかった。
「これからは全ての者がそうして歩ける時代なのです。古き呪縛か

ら解き放たれて」
「古き呪縛」
「そう、古い呪縛だ」
ジェラールは市民達に対して言った。
「今やそれから解き放たれた。そしてそれを守る為に戦おう。行こう、戦士達よ。全ては勝利の先にある！」
「おお！」
市民達は掛け声をあげた。そして口々に叫ぶ。
「フランス万歳！」
「自由と平等よ永遠なれ！」
その声が場を支配した。そして彼等は老婆を導いてそこから去っていく。
マテューが彼等を先導をする。そこに残ったのはジェラールだけであった。
「さてと」
そこに兵士達がやって来て掃除する。馬車も引かれてそこから消える。やがてあの密偵がやって来た。
「同志ジェラール」
「久し振りだな」
彼は側にやって来た密偵に対して声をかけた。

第三幕その三

「いい情報が入りまして」
「マッダレーナのか？」
「いえ」
「では誰のだ？」
「アンドレア＝シェニエの情報です。今リュクサンプールにいます」
「リュクサンプールにか」
ジェラールはマッダレーナの名を呼ぶ時とはニュアンスが違っていた。どうもあまり愉快ではないようだ。
「彼を捕らえたらマッダレーナさんも来ると思いますよ」
「そうだろうな。二人は今惹かれ合っている」
彼の顔がほんの僅かだが歪んだ。
「どうされますか」
「アンドレア＝シェニエは切れ者だ。そう簡単に捕まるものではない」
「それはそうですが」
「ルーシェはもう逃げたのだろう、ロンドンにな。じきに彼もその後を追う。マッダレーナと共にな」
「諦められているのですか」
「そうではない」
彼はその言葉には首を横に振った。
「ただ事実を言っているだけだ」
「そうですか」
「君はアンドレア＝シェニエはよく知らなかったな」
「残念ながら」
「なら仕方ない。彼は切れ者だ。そのうえ弁も立つ。我々の側にいないのが残念でならない」
「それ程なのですか」

「だからだ。おそらく捕まりはしないだろう。そして異国で時を待つ」
「我々が倒れる日が来るのを」
「そうだ。我々の仕事はその日が来ないようにするだけだ。とりあえずは彼は放っておこう」
「わかりました」
ジェラールはシェニエのことは諦めていた。そしてマッダレーナのことも。
（これも仕方ないことだ）
そう思いふっきるしかなかった。
（俺には愛は似合わない。俺の様な男にはな）
自らを蔑んだ。まるで罪を苛んでいる様に。
彼はその場を去ろうとした。その時だった。
「大変だ、大変だ！」
不意に子供の声がした。
「子供か！？」
「ええ。どうやら新聞売りのようです」
密偵が言った。
「新聞！？今日のにしては時間が違うな」
「号外でしょうか」
「号外。何かあったというのか。私は聞いていないが」
彼は顎に手を当てて顔を顰めさせた。子供達は彼の前にも来て新聞をばら撒く。
「凄いニュースだよ、あの男が逮捕されたよ！」
「あの男！？誰だ！？」
「また王族の誰かか！？」
市民達が集まってきた。そして口々に問う。
「王族じゃないよ、詩人だよ！」
「詩人！？まさか」
ジェラールはそれを聞いて目を見張った。

「シェニエだ、アンドレア＝シェニエが捕まったよ！リュクサンプールで捕まったよ！」
「シェニエが！」
ジェラールと密偵はそれを聞いて顔を見合わせた。
「仲間を逃がす為残って戦い遂に捕まったそうだ。仲間はイギリスに逃げたぞ！」
「彼らしいな」
ジェラールはそれを聞いてそう思った。
「けれどこれは大きいですよ」
ここで密偵が言った。
「そうだな」
ジェラールはそれを聞いて言った。
「彼女が来るかも知れない。シェニエを救いに」
「ええ」
「さて、その時どうするかだ」
ジェラールはまた顎に手を当て考え込んだ。
「どうされるおつもりですか？」
「それは君には関係ないことだ」
「失礼」
「いや、いい。だが」
ここで釘を刺すことにした。
「今の言葉は他言は無用だ」
「わかりました」
彼は頭を下げた。
「ですがアンドレア＝シェニエは大きな獲物ですよ。我々にとっても」
「そうだな。彼は今まで一貫して我々を批判してきた。真の革命ではないと」
「あげくの果てには王政よりも酷い独裁政治だと」
彼にとってその言葉は全く心外なものであった。

「そうだな」
ジェラールはそれに応えた。だが応えるその顔は少し曇っている。それが何故かは密偵にはわからなかった。
「ではすぐに戻りましょう。革命クラブへ」
「そうだな」
こうしてジェラールは密偵に促される形で革命クラブに戻った。そこに彼の執務室があるのだ。本来は別のところに置くのだが彼はそこに置いていた。その方が彼は精神的に落ち着くからだ。
「革命の理念を一時たりとも忘れたくはない。だからここに少しでもいたい」
彼はいつもそう言っていた。そしてそれに従いここに執務室を置いたのだ。
執務室に入る。暫くして扉をノックする音がした。
「どうぞ」
ジェラールは入るように言った。すぐに若い党員が入って来た。見ればようやく二十歳になったばかり位の美しい青年である。
「用件は何だね」
わかっていたがあえてそう尋ねた。

第三幕その四

「同志ジェラール、アンドレア＝シェニエへの告発状です」
その手にある書類をジェラールに手渡した。
「先程捕まったという話が出た詩人だな」
「はい。同志ロベスピエールはすぐに彼の処断を貴方とフーキエ＝タンヴィルに任されました」
「タンヴィルか」
タンヴィルは革命裁判所の検察官である。大地主の家に生まれ最初は裁判所の検事だった。だが今では革命裁判所にいる。同じ検事といってもこの裁判所の検事は通常のそれとは違っている。
彼は革命の敵をギロチンに送る死の宣告人であったのだ。実際に彼によって多くの者がギロチンに送られた。
それは王党派やジロンド派だけではない。仲間である筈のジャコバン派も。彼の手により多くの者がギロチン台の露と消えているのだ。
人々は彼をこう呼んでいた。
『死の水先案内人』
『ロベスピエールの鎌』
と。その名は将に死そのものであった。
「同志タンヴィルは既にサインを済まされています」
「そうか」
それは死刑のサイン以外なかった。タンヴィルの書く言葉は全て死を意味するものだからだ。
「ではあとは私がサインをするだけだな」
「はい、これでまた革命の敵が一人この世から消え去ります」
若い党員は純粋な笑みを浮かべてそう言った。
「そうだな」
ジェラールはそれを見て言った。

（君にはまだわからないか）
そして心の中でそう呟いた。
「少し時間をくれないか」
そして彼に対してそう頼んだ。
「何故でしょうか」
「演説をして帰ってきたばかりだ。休ませてくれ。サインはすぐにするから」
「わかりました」
若い党員はそう言って頭を垂れた。そして部屋を後にした。
「ではこれで」
「うん」
党員は去った。部屋にはジェラールだけとなった。
「サインか」
彼はその書類に目をやった。封筒に入れてある。
封筒を開けた。そして中を取り出した。
そこには確かにシェニエについて書かれていた。彼の死刑に同意するかどうか。告発状とはいうがその実は死刑を承認するサインであった。それがジャコバンの告発であり裁判であった。
告発状をさらに見る。下の方にサインがあった。
「タンヴィルの字だ。間違いない」
そこには確かに彼のサインがあった。死刑に同意するかどうか、ロベスピエールの名で問われている。タンヴィルはそれに同意のサインを書いていた。
「やはりな」
彼はそれを見て言った。椅子に腰を下ろしふう、と溜息をついた。
「俺がサインをすれば全てが決まる。そう、彼はすぐに断頭台行きだ」
そして書類を手に取った。
「この書類一枚で彼の命が決まるのだ。あとは形式だけの裁判が行われそれまでの多くの者と同じ運命を歩む。いつもと変わることな

く」
いつもと変わらない、それがジャコバンのやり方であった。彼等は自分達に逆らう者は誰であれ許さないのだ。
毎日多くの者が断頭台に送られる。タンヴィルは狂った様にその書類にサインをする。そして次にサインをする者の一人が彼でもあったのだ。
「何時やっても嫌な仕事だ」
彼はこの仕事が回ってきた時常に心の中でそう呟いた。彼は血を好まなかったのだ。
「今日か明日には決まる。俺のサインで」
ペンを手にする。そして呟いた。
「祖国の敵、実にいい言葉だ。誰もが納得する」
書類にペンをつけた。
「コンスタンティノープル出身、士官学校にいた。格好の経歴だ。しかもジロンドに共感している。いつものパターンか。そのうえ」
ペンを走らせる。
「詩人だ。言葉で扇動し人々を惑わせる。実にいい。ここまであって死刑にならない方がおかしい。今の時代ではな」
ここでペンを止めた。そしてさらに呟いた。
「俺は何をやっているのだ。俺があの時屋敷を飛び出て理想を目指したのは何だったのだ」
五年前のあの日が甦る。最早全てが懐かしい。
「父を連れて屋敷を飛び出した。そして革命に身を投じた。俺は新しい時代を切り開く自由と平等の戦士の筈だった。そう、俺は革命の子だったのだ」
目の前に今までの光景が思い浮かぶ。ロベスピエールとの出会い、テニスコートの誓い、三部会。その全ての場面に彼はいた。そして理想を胸に戦っていた。
だがその理想の行き着く先は何であったか。
「しかし俺はここでも下僕だった。革命に仕える下僕だ。そして革

命の名の下に罪なき者を殺す。何故だ！何故こうなった！」
彼は叫んでいた。
「殺しながらも俺は泣いている。罪なき者の血でこの手は濡れている。もう消えることはない血に濡れている」
その手を見る。ペンも書類ももう目に入らない。
「理想とは何だったのだ。俺は自由と平等、そして博愛が支配する世界を望んでいた。だがそれは血に塗られた恐怖の世界だった。かっての王の時代よりも遥かに陰惨で血生臭い世界だった」
多くの者が死んだ。彼は常にそれを見てきた。
「全ての人が幸福に暮らせる世界、それを目指していたというのに。俺が今いるのは悪夢と恐怖と絶望が支配する暗黒の世界だ。俺は理想とは全く逆の世界にいるのだ」
彼は泣いていた。涙は流してはいない。だが心で血の涙を流していた。
「俺は間違えてしまった。だが後戻りは許されない。俺にはやらなければならないことがある」
そして書類を見た。
「それは死の鎌を振り下ろすことだ。最後に俺の首に振り下ろされるその日までな」
自分の運命を悟っていた。ジャコバン派は仲間であろうが容赦はしない。疑わしい者はすぐに消える運命なのだ。
サインを終えた。その時だった。
「同志ジェラール」
また扉をノックする音が聞こえてきた。

第三幕その五

「どうぞ」
彼は入るように言った。入ってきたのは先程の若い党員ではなかった。密偵だった。
「君か」
ジェラールは彼の姿を認めてそう言った。
「どうしたんだね」
「あの方が来られています」
密偵は恭しい態度でこう答えた。
「あの方？同志ロベスピエールか」
「いえ」
「では同志タンヴィルか。サインなら済んだと伝えてくれ」
彼は今は一人になりたかったのだ。だが密偵はそんな彼に対して言った。
「女性の方です」
「まさか」
ジェラールはそれを聞いて顔色を変えた。
「ええ、その通りです」
密偵は頭を垂れてそう答えた。
「どう為されますか」
「決まっている」
ジェラールはすぐに言った。
「お通ししてくれ。至急にだ」
「わかりました。それでは」
密偵は再び頭を垂れると部屋から立ち去った。そしてすぐにマッダレーナを連れて戻って来た。
「お久し振りです」
マッダレーナはジェラールに対して頭を垂れた。

「はい」
ジェラールもだ。彼はあくまで紳士的な態度を崩さない。まずは密偵に対して声をかけた。
「席を外してくれ」
「わかりました」
密偵は頷くとそれに従った。
扉が閉まる。部屋には二人だけとなった。
「さて」
ジェラールはマッダレーナに顔を向けた。
「一体何のご用件でこちらに来られたのですか、マドモアゼル」
わかってはいたがあえて尋ねた。
「おわかりだと思います」
マッダレーナは強張った顔と声でそう言った。
「はて」
ジェラールはとぼけてみせた。
「私には何のことだかわかりませんが」
「そんな」
「仰っていただかないと」
これは策略だった。彼女を追い詰める為の。
彼の顔は笑ってはいなかった。声もだ。ただ彼女の動きを探っていた。
(どう出るかな)
マッダレーナはその顔を更に強張らせた。もう蒼白になっている。
「あの方を」
「あの方」
「シェニエ様です。アンドレア＝シェニエ。詩人であられます」
「その者なら知っています」
ジェラールはそこで言った。
「革命の敵として今捕らえられています」
「はい」

「このままでは明日にでも裁判にかけられるでしょう」
それ以上は言わなかった。裁判にかけられるのがどういうことか、誰でもわかることだからだ。
「そして貴女は何故ここに。彼とのご関係は」
「その」
彼女は問われて顔を少し俯かせた。
「言わなくてはなりませんか」
「ご自由に」
言うのはわかっていた。あえて彼女の口から言わせたかった。
「あの人は」
彼女は搾り出すようにして言う。
「私の愛しい人です」
「そうでしたか」
わかっていた。だが知らないふりをした。
「ですから・・・・・・。それ以上はおわかりだと思います」
彼女は両目をキッと見開いた。そして叫んだ。
「あの方をお助け下さい！それには貴方のお力が必要です！」
そう言ってジェラールに懇願した。全てを捨てた顔であった。
「私のですか」
彼はここで逡巡した。迷いが強くなったのだ。
(どうするべきか)
彼は一瞬マッダレーナから顔を離した。
(言うべきか。いや)
顔を少し俯かせた。
(言わざるべきか)
迷った。だが言うことにした。
「彼を愛していますか」
「はい」
マッダレーナは頷いた。
「助けたいですか」

「絶対に」
強い声でそう言った。
「その為にここに来たのですから」
真剣であった。その為には全てを捨てる覚悟であった。
ジェラールはその目を見た。唇を噛む。それから言った。
「わかりました。しかし条件があります」
「条件とは」
マッダレーナはジェラールを見た。
「簡単なことです」
ジェラールは顔を歪めさせながら言った。再び彼女から顔を離す。
「貴女が私のものとなることです」
そしてまた彼女に顔を向けて答えた。その顔はマッダレーナのそれに劣らぬ程強張っていた。
「そんな・・・・・・」
それを聞いたマッダレーナの顔が割れそうになった。ジェラールはそんな彼女に対して言葉を続けた。
「簡単なことです。一度だけ私に全てを許されればいいのです」
それがどれだけ卑劣なことか、ジェラールはわかっていた。唾棄すべきことであった。だが彼はそれでもそれを言わざるを得なかったのだ。
「貴女は気付いておられませんか、私の想いを」
「貴方の」
「そうです。私がどれだけ貴女を想っていたか」
ジェラールはそれまでひた隠しにしていた己の本心を遂に告白した。
「あの忌まわしい屋敷で使われていた時から貴女のことを見ていました。夕方にメヌエットのステップを学んでおられた時」
彼は思いつめた顔で話を続けた。
「それだけではない。花園の中にいた時も。詩を読まれていた時も。私は常に貴女だけを見ていました」

それは真実であった。彼は彼女だけを見ていたのだ。
「それは適うことがないと諦めていました。忌まわしい身分という鎖があった。だがそれは断ち切られた。それから貴女を探し続けた。そして今ここにおられる」
彼はここで彼女に強い視線を浴びせた。
「この日が来ることをどれだけ待ち望んだか。今どうしてこの機会を逃すことができようか」
彼女を問い詰める様にして言葉を出す。
「今ここで言いたい。何と思われようが、言われようがかまわない。貴女を私のものとしたい！」
最後には叫んでいた。最早隠すことはできなかった。
「・・・・・・・・・」
マッダレーナはそれを聞き沈黙していた。だがゆっくりとその口を開いた。
「わかりました」
「な・・・・・・」
彼は断られるだろうと考えていた。断ってほしかった。それで諦めがつくからだ。
「それであの方が助かるのなら」
彼女は今にも壊れそうな顔でそう言った。小さいが強い声で。
「私は喜んで貴方のものになりましょう」
「・・・・・・・・・」
今度はジェラールが沈黙した。彼女の心を知り何も言うことができなくなったのだ。
「私の様なものの犠牲であの方が救われるなら」
彼女はここで顔を上げた。
「私は喜んで犠牲になりましょう！」
そして今までとはうって変わって激しい声でそう宣言した。
やはりジェラールは何も言うことが出来なかった。マッダレーナは言葉を続けた。

「革命が起こった時のことです」
彼女は言った。
「人々は私の屋敷にも雪崩れ込んで来ました。そして家の者を次々と殺していきました」
「そうでしょうね」
否定することはできなかった。革命を全て見てきたからだ。

第三幕その六

「父は玄関のところで殺されました。私と母を守る為に。そして」
マッダレーナは一瞬唇を噛んだ。だが苦しい心を抑えてまた言った。
「母は私の部屋の戸口で死にました。私を逃がす為に楯となって」
「あの人が。そうだったのか」
ジェラールは今までマッダレーナの両親を憎みこそすれ認めることはなかった。人間とすら思っていなかった。それは何故か。貴族だからである。だが今の話を聞いてそれが変わった。
(あの人達も人間だったのだ)
それがわかるとは思わなかった。何故それがわからなかったのか。
「私はベルシと共に逃げました。暗い夜道をただひたすら進みました。そして後ろから青白い鈍い閃光が起こりました」
「雷ですか」
「いえ」
彼女はそれに対し首を横に振った。
「私の家が、屋敷が焼け落ちていたのです。今まで住んでいた美しい我が家が」
「あの家がですか」
「はい」
ジェラールはそれを聞いて感慨を感じずにはおられなかった。ただひたすら憎い筈の屋敷だったのに。
「私は一人になりました。けれどそれをベルシが救ってくれたのです」
「彼女が」
「はい。私の為に身を売って。そうして私を救ってくれたのです」
「そうだったのですか」
革命は多くの人の運命を狂わせる。望んでもいない道に追いやっ

てしまう。美名の陰にはそうした残酷な牙が潜んでいるのだ。
「誰もが私の為に不幸になってしまった。私は誰も幸福にすることができなかった」
　それは違う、ジェラールはそう言いたかったがとても言えなかった。
「けれどそんな私が愛を知りました。そして私を愛してくれるという方が現われたのです」
「それが彼なのですか」
「はい」
　マッダレーナは頷いた。
「あの方の為なら私は喜んで犠牲になりましょう。例えどの様なことであっても」
「そうですか」
　ジェラールは最早彼女に指一本も触れる気にはなれなかった。彼の正義を愛する心と誇りがそれを許さなかったのだ。
「マドモアゼル」
　ジェラールは彼女に顔を向けた。
「貴女の心はしかと受け取りました。私は貴女に手を触れることはありません」
「え・・・・・・」
「そして今誓いましょう。貴女が想う人を、アンドレア＝シェニエを必ず救い出して差し上げましょう」
「本当ですか！？」
　マッダレーナは我が耳を疑った。つい先程自分を求めていた者の言葉とは思えなかった。
「私は嘘は言いません、この誇りにかけて」
　彼は他の者にも誇りを忘れるな、と言う。誇りなくして人間ではない、と。だからこそ自らもそれに誓うことができるのだ。
「できるのですか」
「出来なければ私が断頭台に行きましょう」

本心からの言葉だった。命は最初から惜しくはなかった。それよりも誇りを失う方を恐れていた。
「ここに私のサインがあります」
そして告発状を手に取りそれをマッダレーナに見せた。
「しかし今それを消しましょう」
そう言うと自分の名に線を引いた。
「これが証拠です。私は今からアンドレア＝シェニエを救うことに全てを捧げます」
「わかりました」
マッダレーナもそれを見て頷いた。ジェラールの心をようやく全て知ったのだ。
「その御心喜んで受けさせて頂きます」
「かたじけない」
ジェラールは頭を垂れた。
「では外に行きましょう、革命裁判所へ」
「はい」
先にジェラールが演説をした場所である。裁判もそこで行われるのだ。
二人はクラブを出た。そして裁判所に向かって進む。
「御覧なさい、あれを」
ジェラールはここで側を通る憲兵達を指差した。
「あの銃やサーベルを。彼等もまた裁判所に向かっているのです」
「彼等も」
「そうです。そしてそこに彼もいます」
「お願いです、あの人を」
マッダレーナは彼等の銃やサーベルを見て不安を覚えた。そしてジェラールに頼んだ。
「わかっています」
ジェラールはそれに対して頷いた。
「誓ったことは必ず守ります」

彼は言った。
「革命は自分達の子供を喰らい尽くす。誰が言った言葉か」
裁判所に来た。既に何人かの『革命の敵』がそこにいた。
「彼等もまた死んでいく。同じ人間だというのに」
彼は今は苦渋と共にその言葉を呟いていた。かっては革命の理念だと思っていたが。
「さあ、いい席を取ったよ！」
「おい、そこは俺の席だよ！」
見れば市民達が席を争っている。この血生臭い裁判も彼等にとっては娯楽なのだ。
「こうしたことも終わらせたかったのだが」
ジェラールは悲しげな顔で俯いた。
かっての王政下では死刑の執行は一大イベントであった。人々はそれを見る為に集まった。そして出店で物を買い酒や菓子に興じながらそれを見て喝采を叫んでいたのだ。

第三幕その七

ジェラールにとってそれもまた旧時代の忌まわしい悪習であった。彼はそれを何としてもなくしたかった。だが革命はそれを許さなかった。

「革命の敵はその悪事と死をより多くの者に晒すべきだ」

こうした考えがあった。そしてそれは実行された。ジャコバンの下では特にそうだった。

「何も変わってはいない。いや」

彼は俯いたまま言葉を続けた。

「さらに酷い。偽善の仮面がこれ程醜悪なものだったとは」

革命の名の下に多くの血が流れている。だがそれ等は全て革命の下に許される。どれだけの血が流れようとも。

その血は王政の頃とは比較にならない。トリコロールの色は決して自由と平等、そして博愛を表しているわけではないのだ。少なくとも現実は。

「同志達よ、少し落ち着いてくれ！」

見ればマテューがいる。そして市民達を宥めている。

「じゃあ早くはじめてくれ！」

「そうだ、早く見たいんだよ、革命の敵を！」

「今日は大物が来るそうじゃないか！」

シェニエのことであるのは言うまでもない。彼は今日このパリに着いたばかりである。そしてすぐに裁判にかけられるのだ。

物売り達の声もする。席はすぐに満席となった。

やがて陪審員達が来た。だが彼等はあくまで飾りである。見れば皆サン＝キュロットを着ている。しかも顎鬚を生やしている。

そして裁判官達が来た。判決も既に決まっている。結局市民達は死刑の判決が見たいのだ。彼等のことはどうでもよかったのだ。

その証拠と言うべき金髪碧眼の長身の男が颯爽と入って来た。検

事であるフーキエ＝タンヴィルだ。やはり彼もサン＝キュロットだ。青に白に赤。それが一際映えて見える。
「タンヴィル！」
市民達が彼に歓声を送る。
「今日も頼むぞ！」
「あんたのその見事な告発は何時見ても胸がスッとするよ！」
「今日も革命の敵をギロチンに送ってくれ！」
そうなのだ。この裁判の主役はあくまで検事であるこのタンヴィルなのだ。他の者は脇役に過ぎない。それが革命裁判の実態であった。
「あの男を御覧なさい」
今日は弁護人になっているジェラールはタンヴィルを指差してマッダレーナに言った。
「彼の言葉で全てが決まるのです」
マッダレーナはその言葉を聞いて顔を青くさせた。
「しかし私も貴女と誇りに誓いました」
強い声で言う。
「必ずやあの人を救ってさしあげます」
「お願いします」
マッダレーナはそう言うしかなかった。喉をゴクリ、と鳴らした。
次々と『革命の敵』達がタンヴィルにより一方的に死を言い渡される。
かっての宮廷財務官、僧院長、王族。彼等は死刑の判決を聞くとうなだれてその場から消え去る。
「殺せ！殺せ！」
「革命に逆らう奴は皆ギロチン送りだ！」
市民達の声が響く。それはまるで冥界の太鼓の様であった。
遂にシェニエの番となった。彼は昂然と裁判所に入って来た。
「いよいよか」
ジェラールは彼の姿を認めて呟いた。マッダレーナの顔が固まっ

た。
シェニエは憲兵達の立ち並ぶ中を進んで行く。兵士達の険しい顔に臆することなく胸を張っている。
そして被告人の場所に来た。裁判官達と対峙する。
「アンドレア＝シェニエ」
タンヴィルが彼の名を呼ぶ。
「詩人」
「はい」
シェニエはその言葉に頷いた。
「革命に反することを書き、我々を誹謗中傷した」
タンヴィルは告発を開始した。
「ジロンドの者達とも親交があった。間違いはないな」
「ジロンド派とは確かに親交があった」
シェニエはそれを認めた。
「だがそれが悪いとは思っていない」
「何！？」
タンヴィルはそれを聞き眉を顰めさせた。
「私はそれが正しいと今でも確信している」
「それは間違いだ」
タンヴィルはそれに対して反論した。
「ジロンド派は革命の敵だ」
「違う」
シェニエはそれに対して反論した。
「彼等は彼等の正義の下に行動しているだけだ」
「ジロンド派は正義なぞ信じてはいない」
タンヴィルは剣呑な声で言った。
「彼等がやろうとしているのは革命を潰すことだ。そして君が行っていることもそれだ」
「それは違う」
シェニエは怯むところがなかった。

「私も彼等も革命に剣を向けてはいない」
「いや、向けている」
これはタンヴィル達だけでなく裁判官達も言った。
「君のそのペンと口が我々への剣だ。君は剣を持った革命の敵だ」
「ペンと口がですか」
シェニエはうっすらと笑った。
「確かに。私はそれを武器にする一人の兵士です」
「兵士などではない」
タンヴィルはそこに突っ込んだ。
「君は刺客だ」
「お聞きなさい」
だがシェニエはそこでタンヴィルを見据えた。あえて睨まなかった。
「貴方に理性があるのなら」
「うっ・・・・・・」
さしものタンヴィルもその告発を止めざるを得なかった。彼は甚だ不本意ながら黙ることにした。
「あのタンヴィルが黙ったぞ」
「あの詩人、只者ではない」
市民達はそれを見て囁き合った。マッダレーナはまだ顔を青くさせている。一言も話すことはできない。
ジェラールは腕を組み沈黙を守っている。しかしその目はシェニエから離れない。
「私は兵士です。銃と剣ではなくペンと口で戦う兵士です。この二つの武器は世の邪悪なることに向けられます」
彼は言葉を続けた。
「私は祖国のことを歌いました。愛するこのフランスのことを。そしてその崇高なる理念を」
「理念か」
ジェラールはそれを聞いて呟いた。

第三幕その八

「そして革命のことも歌いました。そしてそれに全てを捧げました」
そこで裁判官達とタンヴィルを見据えた。
「それによって死ぬのなら私は本望です。私は喜んで断頭台に向かいましょう。私はその理念に従い、名誉を守ったまま死ぬことができるのですから」
裁判官達は沈黙した。何も言うことが出来なかった。
「さあ、是非私を断頭台に送って下さい。私は死なぞ恐れはしない。そして誇りをもって死への道を歩みましょう！」
高らかにそう宣言した。誰もそれに口を挟むことは出来なかった。
「言いたいことはそれだけか」
だがタンヴィルが口を開いた。
「では裁判を続けよう。弁護人」
「はい」
ジェラールが席を立った。
「貴方の意見を聞きたい」
タンヴィルはジェラールを見た。彼等は同志である。だから安心していた。
だがそれはすぐに崩れた。
「検事殿、そして裁判官、陪審員の方々に申し上げます」
「はい」
タンヴィルが頷いた。全ては彼が支配していた。
「彼は無罪であります」
「な・・・・・・」
タンヴィルはそれを聞いて絶句した。市民達もざわめきだった。
「彼は革命に反することは何一つとして行なっておりません」
「馬鹿な！」
タンヴィルは最後まで聞くことができなかった。机を叩き激昂し

た。
「同志ジェラールよ、何を言われるか！この男が革命の敵でなくて何というのか！」
普段の冷徹さは何処にもなかった。市民も陪審員達もそれを見て驚いていた。
「おい、あれが本当にタンヴィルか！？」
「あの様に興奮する彼ははじめて見た」
彼等も狼狽していた。タンヴィルはそれに構わず続ける。
「同志ロベスピエールからの告発状があるではないか！」
「確かに」
ジェラールはそれは認めた。
「私はそれにサインはしていない。それは何故か」
ジェラールは言葉を続けた。
「私は彼が革命に反しているとは思わないからだ」
「戯れ言を」
タンヴィルは顔を真っ赤にしていた。そして血走った眼で彼を睨んでいた。
「貴方は何を言っているのか自分でわかっているのか」
「当然だ」
激昂するタンヴィルに対してジェラールはあくまで冷静であった。
「私は狂ってもいないし酔っているわけでもない。だから言おう」
タンヴィルを見据えた。
「私は公正な視点に立って言う。アンドレア＝シェニエは無実でろうと！」
「そんな筈がない！」
タンヴィルは叫んだ。
「彼は革命の敵なのだ！革命の敵は一人残らず断頭台に送るべきだ！」
「そしてそれにより多くの者が死んだ」
「当然だ、革命に敵対するのだからな」

「その結果我々は何を得たか」
ジェラールはここでタンヴィルだけでなく辺りを見回した。裁判官や陪審員、そして市民達も見た。
「同志諸君、よく聞いて欲しい」
そして再び口を開いた。
「今我がフランスは危機に瀕している」
「革命の危機だ」
「違う」
タンヴィルの言葉に首を横に振った。
「それは我々の血だ。我々は敵と戦うよりまず先に身内で殺し合っている。同じフランスを愛する者達を」
「ジェラールは何が言いたいんだ」
市民達はそれを聞き大いに戸惑っていた。
「私の言うことは必ずわかってもらえると信じている」
彼は言った。
「今はわかってもらえなくともいずれは必ず」
「そんな事は有り得ない！」
タンヴィルはなおも言った。ジェラールは彼に顔を向けた。
「いや、有り得る。違うな、必ずある」
「クッ」
彼は歯噛みした。そしてまた沈黙した。
「今彼を断頭台に送ると我々は必ずやそのことで後悔する日が来るだろう。我がフランスの栄光を守る為にも私は断固として彼の命を救うことを望む！」
「裁判官！」
たまりかねたタンヴィルが叫んだ。
「彼のこれ以上の発言を禁じて下さい！彼は明らかに錯乱しています！」
「わかりました」
裁判官達は頷いた。そしてジェラールに対して言った。

「弁護人、それ以上の発言を禁止します」
「・・・・・・わかりました」
不本意ながらそれに従った。彼も決まりを破りたくはない。
「では判決に移ります」
裁判官の一人が言った。そして陪審員達に顔を向けた。
「お願いします」
「わかりました」
彼等は答えた。そして彼等は口々に言った。
「有罪」
と。元々決まっていたことだ。
全員有罪であった。そもそもこの陪審員も皆ジャコバン党員である。服や外見だけでそれが容易にわかる。
「では判決を下す」
裁判官の中央の者が木槌を叩きながら言う。そして判決文を読み上げる。
「詩人アンドレア＝シェニエを革命に反する罪で死刑とする」
誰も驚かなかった。皆それが当然だと思っていた。
シェニエもである。彼は昂然と胸を張ってそれを聞いていた。
タンヴィルは誇らしげにその判決文を聞いた。彼のいつもの動作である。
だが市民達は沈黙していた。誰も一言も発しなかった。
「いつもはあれだけ騒がしいのに」
陪審員達もそれを見て不思議に思った。
「これは一体どういうことだ」
彼等もその異変に気付いていた。何かが違った。
「マドモアゼル」
ジェラールは傍らにいるマッダレーナに顔を向けた。
彼女の顔は蒼白となっていた。だが泣いてもなく、取り乱してもいなかった。
あくまで毅然として立っていた。表情は険しかったが自らの沸き

起こる感情に必死に耐えていた。
ジェラールはそれを見て安心した。見ればシェニエは今彼の前に来ていた。
「有り難う」
そして右手を差し出してきた。
「礼には及ばない。私は彼女に頼まれただけだ」
彼はシェニエの手を固く握りながらマッダレーナに顔を向けた。
「彼女？」
シェニエはそれにつられるように顔をそちらに向けた。
「あ・・・・・・」
そこに彼女がいた。マッダレーナはシェニエに対して頷いて応えた。
「私は彼女に導かれたのだ。正しい道に」
「そうだったのか」
「私に礼は言わなくていい。言うのなら彼女にしてくれ」
「マッダレーナ」
シェニエはそれを受けてマッダレーナに語りかけた。
「はい」
マッダレーナもそれに応えた。
「有り難う。今は多くは言えない。けれど有り難う」
「はい」
この時彼女の心にある決意が宿った。
「ジェラール、やはり君に感謝する。君がいなくては彼女に今こうして会うことはできなかった」
「そうか」
ジェラールはその言葉を謹んで受けた。
「この恩は一生忘れない。例え私が死のうとも」
シェニエは神を信じている。だからこそ言える言葉であった。
「アンドレア＝シェニエ」
そこに兵士達が来た。彼に退場するよう促す。

「わかっている」
彼は頷いた。そして兵士達に従った。
「ジェラール、マッダレーナ、最後にまた会うだろう。だが忘れないでくれ」
彼の顔は紅潮していた。死なぞ全く恐れてはいなかった。
「私は貴方達と出会えたことを幸運に思う。貴方達は私の一生の最後の幸運だった」
そして彼は裁判の場を後にした。昂然と胸を張ってその場から立ち去った。それは勝利者の行進であった。

第四幕その一

第四幕　監獄にて

死刑判決を受けたシェニエはサン＝ラッザーロの監獄に捉われていた。ここは政治犯を収容する監獄である。ここから多くの者が断頭台に最後の行進を行っている。

「政治犯か」

その中の一室にいるシェニエはふと呟いた。

「革命の時には最も忌み嫌われたものだが」

かっての王政下では政治犯はバスティーユの監獄に送られ、そこに収容されていた。実際には政治犯は殆どおらず中にいるのは裕福な貴族の者ばかりでその待遇も決して悪くはなかった。サディズムの語源として知られる作家にして稀代の偏執狂的性愛者マルキ＝ド＝サド侯爵もここに収容されていた。

「あの頃より遥かに酷い。これでは太陽王の治世の方が遥かにいい」

ルイ十四世である。長きに渡ってフランスに君臨した国王である。絶対王政の熱烈な信奉者でもあった。

絶対王政には批判も多い。だが国王やその側近達がこれを採ったのには理由があった。それは貴族達を抑える為である。

欧州は伝統的に貴族の力が強い。かっては国王も彼等の同僚に過ぎなかった。それが徐々に王権を伸張させていくにあたって多くの血が流れた。

フランスはそれに成功した国であった。カペー朝の尊厳王フィリップ二世からはじまりそれは絶え間なく続いた。

その総決算とも言えるのがルイ十四世の発言であった。

「朕は国家なり」

一見傲慢ともとれる言葉である。実際に彼は多分に不遜な部分の多い人物であった。だがそれだけでこの様な発言をする程彼は愚かではなかった。そうでなくて誰が太陽王と呼ぼうか。

彼はこの時国家の全権を掌握したと宣言したのだ。貴族の力を全て抑えて。王権神授説にしろ絶対王政にしろ国王に権限を集中させ、強力な中央集権体制を確立し、国家の安定を図る為であったのだ。
そこから啓蒙主義等がはじまると言ってよい。強力な国家の存在があってはじめてそうした主義が芽吹くものなのであるから。プロイセンにしろロシアにしろオーストリアにしろそうであった。これ等の国々で啓蒙専制君主が出たのは彼等にそれだけの力があったからだ。無論彼等自身の能力も大きく関係していたが。
「フリードリヒ大王、エカテリーナ二世、ヨーゼフ二世」
シェニエは彼等の名を呟いた。皆欧州にその名を知られた君主達である。だがその啓蒙思想の本場であるフランスではその様な国王は出て来なかった。それがフランスの不幸であった。
「ルイ十四世の頃はそれでもよかった。だが時代は常に動く」
そうであった。宮廷でそれを理解している人物は誰もいなかった。文化は爛熟してもその政治は旧態依然としていた。
「それは改められるべきだった。だが」
彼は牢の外を見た。鉄格子越しに中庭が見える。
「血により支配は何としても避けなければならなかった。革命の忌まわしい落とし子の跳梁だけは避けなければならなかったのだ」
シェニエも最初からそれに気付いていただけではない。それは革命が進むにつれ出てきたものであったからだ。
「彼等は真の革命の子達ではない」
彼はそう考えていた。
「彼等の陰に我々は今後も苦しめられるかも知れない。それがあまりに危険なものであるだけに」
不幸にしてその危惧は的中した。人間はそれからもこのジャコバン派の後継者達により多くの血を流すこととなったのだ。
ソ連がそれである。ソ連の実態はマルクスではなかった。このジャコバン派そのものであったのだ。
「貴族を殺せ！」

「革命の敵は一人残らず抹殺しろ！」
彼等は口々にそう叫んだ。そして反対する者を一人残らず殺していった。
ナチスもである。彼等もまたジャコバン派であった。
「劣等民族を殺せ！」
「ナチスに逆らう者は生きる必要がない！」
彼等もまたロベスピエールを戴いてた。スターリンでありヒトラーだ。そしてこの二人の独裁者により人間の歴史は大いに狂わされることになる。彼等は敵を追い求めていた。そして常に革命を欲していた。ナチスが民主主義でないようにソ連もまた民主主義ではなかった。忌まわしい全体主義であった。そう、ジャコバンは全体主義であったのだ。到底民主主義と呼べるものではなかった。

第四幕その二

しかし人々がそれに気付くまでに気の遠くなるような時間がかかった。それまでにどれだけの血が流れたか。だが神ならぬ身のシェニエはそこまではわからない。ただ危惧するだけであった。

「今日も眠れなかったな」

中庭はもう明るくなりだしている。夜が明けようとしていた。

彼は机に座っていた。その上には紙がある。

手にはペンがある。何か書きものをしていたようだ。

「もうすぐ終わるな」

それを見て満足気に微笑んだ。

「多分これが最後の詩になるだろう」

やがてペンを置いた。そして目を閉じた。１０６

「少し休むか」

休息に入った。中庭に誰かが姿を現わした。

「ここだね」

その男は顔中を髭で覆っていた。そしてサン＝キュロットを着ている。ジャコバンのトリコロールだ。

「はい」

隣にいる案内役と思われる兵士が頷いた。

「よし」

髭の男はそれを聞き頷いた。そして懐から何かを取り出した。

「少ないがこれを」

それを兵士の手に渡した。

「有り難うございます」

「そのかわり少し時間を多めにね」

「わかっております」

兵士はその場を後にした。男は兵士が去ったのを見届けるとシェニエの牢に向かった。

「シェニエ」
そして彼に語り掛けた。
「ん！？」
彼はその言葉に目を開けた。そして鉄格子に顔を向けた。
「誰だい、君は」
その男の顔を見て怪訝な顔をして問うた。
「わからないか」
「残念だけれど」
ニヤリと笑う男に対してシェニエは首を傾げたままである。男は髭に手を当てた。
「これでわかるかな」
「あっ」
髭が外された。シェニエは彼の顔を見て思わず声をあげた。
「僕だよ」
それはルーシェであった。彼はシェニエに対し微笑んだ。
「ルーシェ、君は確か」
「途中までは逃げていたけれどね。引き返したんだ」
「何故だ、今このパリがどれだけ危険かわかっているだろう、ましてやこんなところにまで」
「それがわからないでここまで来ると思うかい？」
「・・・・・・いや」
シェニエは首を横に振った。
「君は聡明だ。それ位わかっている筈だ」
「いや、わかっていないのは君だ」
「そういうことだい？」
「聡明などということは人にとって全く不要なものだ。それが卑怯なものならばね」
「ルーシェ・・・・・・」
「シェニエ、僕は忘れてはいないよ、君との友情のことを」
彼等は若い頃より親友同士であった。そしてこの革命の中では苦

楽を共にしていた。
「だから来たんだ。君との別れの為に」
「そうだったのか」
シェニエもようやく微笑んだ。
「有り難う、友よ。このことは死んでも忘れないよ」
「礼には及ばないさ。それよりも何か言い残すことはあるかい？良かったら他の人々にも伝えておくよ」
「遺言か」
「そういうことになるね」
ルーシェは表情を消した。やはり微笑んで言うことはできなかった。
「それなら」
シェニエは机に目を向けた。そこには先程まで書いていた詩がある。
机の前に進んだ。そしてそれが書かれた紙を手にする。
「これを」
そしてルーシェに手渡した。
「最後にまず読みたいのだけれど」
「いいとも」
ルーシェは頷いた。シェニエはそれを受けて口をゆっくりと開いた。
「ある五月の美しい日の様に」
彼は詩を朗しはじめた。
「それはそよ風に口づけと光の優しい愛撫を携えて、次第に大空に消えていくその陽の様に詩を司る女神の接吻と優しい愛撫と共に私は今私の人生の中で最も高貴なる頂を登っている」
ルーシェはそれを黙って聞いている。
「人の運命はそれぞれだ。私の運命は今終わろうとしている。おそらく私の詩の最後の一行が終わるよりも早く死神の鎌が私に死をもたらすだろう」

死という言葉を聞いたルーシェの顔が暗くなった。
「詩よ、私が愛した詩よ」
シェニエの声が強くなった。
「私にとって最後の詩の女神になってくれ。貴女に仕えるこの下僕に燃え上がる理想と不変なる情熱、この二つの炎をお与え下さい。そして私は貴方に捧げものをしましょう」
彼は顔を上げた。
「貴女が私の心に宿っている間にこの魂を。死に今向かおうとする男の最後の想いをこの詩に託して捧げましょう」
「シェニエ」
「ルーシェ、これで終わりだ」
シェニエはうっすらと微笑んだ。

第四幕その三

「私の最後の詩だ」
「・・・・・・確かに受け取った」
彼は言った。小さいが確かな声で。
「有り難う」
二人は固い握手をした。鉄格子を挟んで。そこに先程の兵士が戻って来た。
「ムッ」
ルーシェは素早く髭を着けた。そして兵士に顔を向けた。
「時間です」
「そうか」
そして頷いた。
「ではこれで」
「うん。永遠にさようなら」
「そう、永遠に」
これが最後であった。二人は最後に互いを見た。
ルーシェは背を向けた。そして終わりであった。
「今日で終わりだ」
シェニエはルーシェの姿が見えなくなったのを確認して言った。
「けれどその最後に友と会うことができた。神よ、このご配慮に感謝致します」
そして片膝を折った。
「これで思い残すことはない。あとは暫く休もう。最後のその時まで」
椅子に座った。そして目を閉じる。眠るつもりであった。
だがそれは出来なかった。また誰かがやって来た。
「ん!?」
シェニエはその気配に気付いた。顔を上げた。

新たに二人来ていた。二人共彼が非常によく知る者であった。
「ジェラール」
まさか来るとは思わなかった。そしてもう一人。
「貴女がここに来るなんて」
マッダレーナはシェニエに対しにこりと微笑んだ。
「シェニエ」
ジェラールが語りかけてきた。
「この方と話をしてくれないか」
「喜んで」
ジェラールはその言葉に黙って頷いた。そして鉄格子に向かった。
「む！？」
鍵に手をかけた。そして鍵をあけたのだ。
「ジェラール」
「最後だ。いいだろう」
彼はそう言って微笑んだ。
「いいのかい？君にも迷惑がかかるよ」
「おかしなことを言う」
ジェラールは笑って言った。
「私が今更そんなことを気にすると思っているのか」
「いや」
ジェラールもまた覚悟を決めているのだ。そして彼はマッダレーナを導いた。
「どうぞ」
「はい」
マッダレーナはそれに従い中に入った。二人は鉄格子の中で向かいあった。
「お久し振りです」
マッダレーナは静かに言った。
「確かにね。ほんの数日しか経っていない筈だけれど」
シェニエは言った。

「まるで何十年も経ったかのようだ。時の経ち方は本当に不思議だ」
「はい」
「最後に会えて嬉しいよ。けれどこれが本当に最後だ」
「いいえ、違います」
彼女はそこで首を横に振った。
「私も一緒です」
「そんな冗談は言うものじゃないよ」
シェニエは強い口調で言った。
「貴女はまだこれから長く輝かしい人生が待っている。それを送らずしてどうするのか」
「いえ」
彼女は再び首を横に振った。
「私の命は貴方に捧げられています。だから」
「共に死ぬというのか。しかし」
「今日の死刑囚の中に一人の若い婦人の方がおられますね」
「それは聞いているよ」
シェニエは答えた。
「名前は確か・・・・・・。レグレイといったね」
「はい」
「あの人が何か」
「あの方の替わりに私が行きます。断頭台に」
「馬鹿な、そんなことが」
シェニエはマッダレーナだけでなくジェラールも見た。鉄格子の向こうにいる彼は黙って頷いた。
「そうか、名前を書き換えたのか、君が」
「そうだ」
ジェラールは答えた。
「彼女もまた無実で死ぬ身だった。マッダレーナは彼女と替わった。それにより一人の罪なき女性の命が救われる」
「そうか」

シェニエは全てを理解した。そしてそれを受け入れた。
「わかった」
彼は言った。
「私は行こう、貴女と共に」
「はい」
マッダレーナも頷いた。
「それこそが私の願いです」
「そうか、ならば共に行きましょう。最後の戦いに」
ジェラールはそれを黙って見守っていた。だがやがてそこから立ち去った。
「俺にも最後の仕事がある」
彼もまた命を捨てていた。
「この二人を救わなければ。何としても」
彼は向かった。死を司る男の下へ。
「同志ロベスピエール」
彼の同志でもある主人でもある男。ジャコバン派の絶対者だ。
「何としても彼から手に入れなければ。二人の命を」
決意した。そして一直線に向かった。
だがシェニエもマッダレーナもそれに気付いてはいなかった。ただ硬く握手をしていた。

第四幕その四

「抱擁はしません。今我々に最も相応しいのはこの硬い握手です」
「はい」
それは両手で行われていた。
「戦いを誓った者同士だけに許されるこの握手。これは他のどのようなものよりも素晴らしい」
「勝利を手に入れる為の誓いなのですから」
「私は永遠に生きます。貴女のその美しい瞳の中に」
そう言ってマッダレーナの瞳を見た。
「その中から私は天界に旅立ちましょう」
「ならば私も」
マッダレーナも言った。
「貴方と共に天界へ参りましょう。一人の女性の命を救って」
「素晴らしいことです」
シェニエはそれを聞き言った。
「それこそ真の神の道」
「いえ、その様な」
「そんなことはありません。私はこの革命においてそうした人達を多く見てきました」
「多くですか」
「はい、残念なことに」
彼は一瞬顔を曇らせた。だがすぐにそれを上げた。
「しかしそれは美しい光景でした」
そしてその場を語った。
「断頭台に送られようとしているのに皆毅然としていました。それまでどの様に腐敗していたとしても」
「貴族達も」
「はい。僧侶も商人も民衆も。断頭台はあらゆる人々の血を吸って

きました。革命の名の下に。時には戦場で死ぬべき軍人や革命家の血まで」
　それが革命の正体であった。革命はその名の下に夥しい血を欲する。それに飽きることは決してない。
「ですがそこに向かう人の多くは胸を張っていました。そして誇りをもって死に向かっていったのです」
「何と素晴らしい」
「はい。彼等は死を前にしても戦っていました。そして勝利を目指していました。そう、今の私達の様に」
「私達の様に」
「そうです。私達もこれからそうなるのです。勝利者となるのです」
「勝利者に」
「ええ。圧政にも屈せず信念を最後まで貫いた本当の意味での勝利者に」
「私もですね」
「そうです。貴女にはその資格があります」
　シェニエは言った。
「一人の女性をその身を以って救われるのですから」
「私は幸せです」
「私もです。そしてこの幸福は永遠に続く」
「天界にて」
「それは愛の勝利」
「永遠不滅の勝利」
　二人はもう恍惚となっていた。それは決して敗者のそれではなかった。
　そこで太鼓の音が聞こえてきた。死刑囚を運ぶ護送車の到着を知らせる太鼓だ。
「来ました」
「死が」
「はい、戦場へ私達を送る使者が」

そこで中庭に陽が差し込んできた。
「あれを御覧なさい」
シェニエはその光を指し示した。
「暁と共に訪れました」
「朝の光と共に」
マッダレーナもその光に目を向けた。
「死を知らせる光が」
「愛を知らせる光が」
そこで二人を呼ぶ声がした。
「今日の囚人」
二人はそれを聞いて笑った。勝利の笑みだった。
「アンドレア＝シェニエ！」
「はい！」
シェニエは答えた。
「マッダレーナ＝ディ＝コワニー！」
「はい！」
マッダレーナも答えた。そこに先程の兵士がやって来た。
「こちらへどうぞ」
「わかりました」
二人が同じ牢の中にいるのは見逃した。ジェラールに言われていたからでもあるがその前にシェニエもマッダレーナも引き際を知る者達だと知っていたからだ。無論ここには誤解もある。二人は引き際を知っているのではないのだ。だが彼にはそれはわからなかった。

第四幕その五

二人は手を握り合ったままゆっくりと進む。そして中庭に出た。
「行こう」
「はい」
二人は頷き合った。
「勝利への階段を昇りに！」
そして二人は外に出た。そこには既に護送車があった。
足をかけた。そして乗った。
「おっと」
シェニエはここで兵士達に対して言った。
「縄はいらないよ。私達は決して逃げない」
「そうですか」
彼等もシェニエのことは聞いていた。だからここはそれを受け入れた。
「私は罪人ではない。彼女も」
「そうですか」
彼等の中にはそれをわかっている者もいるだろう。だがそれは決して言うことはできないのだ。
「出発します」
護送の兵士達を率いる将校が彼等に言った。
「はい」
「わかりました」
二人は答えた。将校はそれを確認すると部下達に言った。
「出発！」
「ハッ！」
兵士達は敬礼した。そして車を進ませた。
二人はその中においても笑っていた。やはり勝利を待つ笑みであった。

そのまま監獄を後にする。そしてそれは次第に見えなくなった。
そこに誰か来た。馬から降りそれを見送った。
「遅かったか・・・・・・」
ジェラールだった。彼は護送車が消えたのを見てその場に崩れ落ちた。
「俺は誰も救うことが出来なかった・・・・・・」
動けなかった。その手には一枚の紙があった。そこにはこう書かれている。
『プラトンでさえ彼の祖国から詩人を追放した』
ロベスピエールの字であった。それが何を意味しているかジェラールには嫌な程よくわかった。
プラトンはこう考えていた。全ての芸術の中で詩こそが美のイデアを模倣したものであると。理想家の彼は詩こそが彼の考え美の理想をあらわしたものであると考えていたのだ。
そのプラトンが詩人を追放する。即ち特例として認めないということだ。シェニエの助命はならなかったのだ。
「終わった。全てが」
ジェラールはそう言うと立った。そしてその場から立ち去った。
「革命の何もかも。俺の全ては灰燼に帰した」
それを最後は彼はジャコバン派から姿を消した。その行方を探られたが彼が何処に行ったか誰も知らなかった。
シェニエの処刑からすぐに革命は大きな転換点を迎えた。『テルミドールの反動』である。
これによりジャコバン派とロベスピエールは失脚した。そして今度は彼等が断頭台に向かった。
「殺せ！殺せ！」
「死神共を殺せ！」
かって貴族達に向けられていた罵声が今度は彼等に向けられた。だがロベスピエール達はそれに臆してはいなかった。
「私達もまた革命に殉ずる。恥ずべきことはない」

そう言って断頭台に向かった。そして彼等もかってシェニエ達がそうであったように毅然として死に立ち向かった。

その日の午後セーヌ河に一人の男の死骸が浮かび上がった。それはジェラールであった。

彼の懐には一通の書があった。それは遺言であった。

『革命に全てを捧げた男ここに眠る』

最後にはそう書かれていた。彼もまた革命に殉じたのであった。

多くの血が流れフランス革命は続いた。そしてそれは世界の歴史の大きなうねりであった。それを否定することはできない。そしてその中で生きた多くの者達の人生も。

アンドレア＝シェニエ　　完

２００４・９・１８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3407f/

アンドレア＝シェニエ

2011年4月28日00時35分発行